日本中央アジア学会報

第14号　2018年

目　　次

特別寄稿

歴史書としての聖者伝 ･･ 澤田　稔 ･･ 1
――16～18世紀カシュガル・ホージャ家の伝記『タズキラ・イ・ホージャガーン』――

日本中央アジア学会 2017 年度大会プログラム ････････････････････････････････････ 23

日本中央アジア学会 2017 年度大会公開講演要旨

タシュケント在住の一ウイグル知識人の歴史的記憶 ････････ 新免　康・塩谷　哲史 ･･ 25
――社会変動と越境――

歴史書としての聖者伝 ･･ 澤田　稔 ･･ 27
――16～18世紀カシュガル・ホージャ家の伝記『タズキラ・イ・ホージャガーン』の翻訳を終えて――

日本中央アジア学会 2017 年度大会発表要旨

ヴォルガ・ウラル地域テュルク系ムスリム家族の法社会史研究の試み ･･･ 磯貝　真澄 ･･ 29
――19世紀末の婚姻簿から――

ポスト・ソビエト時代のアゼルバイジャンにおける国家と宗教 ･･･････････ 岩倉　洸 ･･ 32
――カフカース・ムスリム宗務局から見るイスラームの国家管理の諸相――

ポストソ連期グルジアにおける政党の意味 ･･････････････････････････ 立花　優 ･･ 34
――下野後の統一国民運動ＵＮＭの検討を中心に――

日本の中央アジア外交に見る中露要因 ･････････････････････ マフムドフ・ウミド ･･ 36

カザフスタンにおける音楽伝承の再編成と音楽学者の役割 ････････････ 東田　範子 ･･ 39
――1970年代以降の展開――

現代ウズベキスタンにおけるドゥアー……庄司　翼……42

旧ソ連・中央アジアのスーフィズムと病気治療……和崎　聖日……45
――アフマド・ヤサヴィーの現代的意義に寄せて――

中央アジア研究動向

中央アジアにおける帝国医療研究の射程……井上　岳彦……47
――アンナ・アファナシエヴァ氏のセミナー報告 “Imperial Laboratory: Russian Anti-Plague Campaigns in the Kazakh Steppe in the Early Twentieth Century” から――

ルーヴェン・カトリック大学所蔵ドゥンガン関連資料群
（リムスキー＝コルサコフ・コレクション）の調査……海野　典子……53

中央アジア現地事情

サマルカンドのイスラム・カリモフ廟を訪れて……帯谷　知可……59

中央アジア関連研究文献リスト2017……67

投稿規定・執筆要領……73

日本中央アジア学会会則……79

JACAS BULLETIN

No.14 2018

Special Contribution

Hagiography as a Source for the Compilation of the History of the Kashghariya in the 16th-18th Centuries:
Muḥammad Ṣādiq Kāshqarī's *Tadhkira-i khwājagān* ····· SAWADA Minoru ·· 1

Program of the Annual Meeting ····· 23

Abstracts of Public Lectures

The Historical Memory of an Uyghur Intellectual Residing in Tashkent:
Social Changes and Cross-Border Migrations ····· SHINMEN Yasushi, SHIOYA Akifumi ·· 25

Hagiography as a Source for the Compilation of the History of the Kashghariya in the 16th-18th Centuries:
Accomplishing a Japanese Translation of the *Tadhkira-i khwājagān* ····· SAWADA Minoru ·· 27

Abstracts of Public Lectures

An Approach to Socio-Legal History of Turkic Muslim Families in the Volga-Ural Region:
The Use of Parish Marriage Registers in the 19th Century ····· ISOGAI Masumi ·· 29

State and Religion in Post-Soviet Azerbaijan:
Aspects of the State Control of Islam with Respect to the Caucasus Muslim Board ····· IWAKURA Ko ·· 32

The Significance of Competitive Opposition in Post-Soviet Georgian Politics ·· TACHIBANA Yu ·· 34

Russia and China as Factors That Influence Japan's Central Asia Policy ··· MAHMUDOV Umid ·· 36

Reconfiguring the Transmission of Music and the Role of Musicologists in Kazakhstan:
An Overview of Developments since the 1970s ····· TODA Noriko ·· 39

Du'as in Contemporary Uzbekistan ····· SHOJI Tsubasa · · 42

The Treatment of Illness in Post-Soviet Central Asia Using Methods of Sufism:
A Focus on the Tradition of Aḥmad Yasavī ····· WAZAKI Seika · · 45

Reports on Central Asian Research Trends

A Seminar by Prof. Anna Afanasyeva Entitled "Imperial Laboratory:
Russian Anti-Plague Campaigns in the Kazakh Steppe in the Early Twentieth Century"
(October 24, 2017, Ludwig-Maximilian University of Munich, Germany) ··· INOUE Takehiko · · 47

Svetlana Rimsky-Korsakoff Dyer Collection:
Research Materials for Dungan Studies Stored at Leuven Catholic University ····· UNNO Noriko · · 53

Reports on the Current Situation in Central Asia

Visit to the Memorial Complex of Islam Karimov in Samarkand ····· OBIYA Chika · · 59

List of Publications 2017 ····· 67

特別寄稿

歴史書としての聖者伝
──16～18世紀カシュガル・ホージャ家の伝記『タズキラ・イ・ホージャガーン』[1]──

澤田　稔

はじめに

カシュガル・ホージャ家というのは、師匠や先生の意味をもつ「ホージャ」という称号で呼ばれたスーフィー（イスラーム神秘主義者）の血族である。彼らの先祖でマフドゥーミ・アーザム（「偉大なる尊師」）の敬称で知られるアフマド・カーサーニー（1542年没）は、西トルキスタンにおいてナクシュバンディー教団の道統（スィルスィラ）の継承者、教義の理論家として権威をもち、世俗君主からの保護も得て勢威を誇った。そして、その子孫の一部は16世紀後半以降、東トルキスタン（タリム盆地）に進出し、そこで大きな宗教勢力を築くことに成功した。我々はそのマフドゥーミ・アーザムの子孫を「カシュガル・ホージャ家」［佐口 1971: 64-70］とか「マフドゥームザーダ達」（Makhdūmzādas）［Fletcher 1978: 87-90］などの呼称で一括している。ただし、カシュガル・ホージャ家は進出当初から二つの家系に分かれており、それぞれ独自の活動を行っていた。そして彼らは、チンギス・ハーンの二男チャガタイの末裔でトルコ化、イスラーム化した君主（ハーン）の建てたモグール国や、西モンゴル系オイラト族のジューンガル王国の統治、支配のもとで活動し、地域社会の政治的動向にも深く関わった。

著述家ムハンマド・サーディク・カシュガリー（Muḥammad Ṣādiq Kāshqarī）は18世紀後半、カシュガル・ホージャ家の歴代指導者の行状を中心として『タズキラ・イ・ホージャガーン（ホージャたちの伝記）』（*Tadhkira-i khwājagān* / *Tadhkira-i khōjagān*）という書物を中央アジアのトルコ系文語であるチャガタイ語で書き上げ、同時代の記録は無論のこと、後世の史書も伝えていない貴重な情報を残した。チャガタイ語聖者伝に通暁する濱田正美氏によれば、東トルキスタンの聖者伝はほぼ例外なく、聖者の名を付けて誰それのタズキラと題されている

[1] 本稿は、2017年度日本中央アジア学会年次大会（2018年3月24日）において講演した内容を部分的に修正、加筆して文章化したものである。講演会においてコメンテイタの小沼孝博氏と秋山徹氏、司会の宇山智彦氏をはじめ参加者の方々から貴重なご意見をいただいたことに感謝する。ただし、必ずしもそのご意見のすべてを本稿に反映できたわけではないことを予めお断りしておきたい。

が、全くの空想の産物としての聖者伝と神秘主義的世界観に基づく事件史としての聖者伝という二つの極端な違いのタイプ､そしてその両極端の中間に位置するタイプがあるという［濱田 2006: 9, 11］。そのなかで、本書『タズキラ・イ・ホージャガーン』は「いわば真正の歴史記述により近い作品」［濱田 2006: 10］なのである。

本稿では、東トルキスタンの聖者伝のなかで、事件史としての聖者伝、つまり歴史書としての聖者伝の代表と言える『タズキラ・イ・ホージャガーン』が伝える政治的側面の情報を紹介し、この伝記においてホージャたちの宗教的な活動や奇跡的なエピソードよりも具体的な政治的事柄に主眼が注がれている理由を考えてみたい。

1．地域と時代背景

『タズキラ・イ・ホージャガーン』で叙述される主要な地域は、中央アジア東部の天山山脈以南のオアシス農耕地域であるタリム盆地の西半部、すなわちアクス、ホタンより西側、カシュガル、ヤルカンドにいたる広大な地域である。16 世紀初頭から 18 世紀半ばにかけてタリム盆地を統治、あるいは支配した国家は二つあった。すなわち、モグール国とジューンガル王国である。

チンギス・ハーンの第二子チャガタイの子孫が君主となり、天山山脈以北の遊牧地域からタリム盆地にかけて統治したモグーリスターン・ハーン国（東チャガタイ・ハーン国）が 15 世紀末から解体していくなかで、天山山脈以北の草原地域もオイラト、カザフ、クルグズなど新興の遊牧民に奪われたが、1514 年にそのハーン家のサイードがタリム盆地西部に進出して政権を樹立した。そして、サイード･ハーン以後、その子孫たちがヤルカンドを拠点にハーン国の版図、領域を東方のトゥルファン、ハミ方面にまで広げることになる。なお、この国家はカシュガル・ハーン国またはヤルカンド・ハーン国と通常名付けられているが、17 世紀後半に書かれたこのハーン国の歴史書には「モグール国」（mamlakat-i Moghūliyya）［Akimushkin 1976: Persian text, 101］という表現が見られ、ロシア、ソ連の研究者はモグーリヤないしモゴール国の名を用いているので、本稿ではモグール国と呼称する。

17 世紀の後半になると、天山山脈北方の遊牧地域に、西モンゴル系オイラト族のジューンガル王国が勢いを増してきて、ガルダン・ボショクト・ハーンの治世からはイリを拠点に大帝国になっていく。なお、イリという地名は『タズキラ・イ・ホージャガーン』では、他のイスラーム史料に見られるようにイラと表記されている。先にハミ、トゥルファンを占領したガルダンは、1680 年にカシュガル、ヤルカンドを攻略してタリム盆地の全域を支配下におき、その結果モグール国は実質的に滅亡することになる。なお、『タズキラ・イ・ホージャガーン』において、ジューンガル王国あるいはオイラト族のことはカルマクと呼ばれている。

そしてこの頃から、ジューンガル王国の宗主権下でカシュガル・ホージャ家がヤルカンドを中心にタリム盆地西半部を統治することになる。そして、『タズキラ・イ・ホージャガーン』の叙述の大部分はこの時代のことを扱う。

ところで、『タズキラ・イ・ホージャガーン』には事件が起きた年などの年代は記されていないので、モグール国やジューンガル王国などの政治的動向が年代決定に役立つ(2)。ガルダン以後、勢威をふるったジューンガル王国も、1745年に君主のガルダンツェリンが死去した後、君主の位をめぐり内紛が生じる。その内紛の果て、1754年に王族のアムルサナーが清朝に投降し、乾隆帝に援助を求めた結果、翌年に乾隆帝はイリに向けて軍隊を送り、ジューンガル王国を滅ぼす。しかし、アムルサナーは望む形での君主の位を認められず、清朝に叛旗をひるがえした。

一方ジューンガル王国が滅びた結果、その支配から解放されたカシュガル・ホージャ家は、二つの党派がそれぞれ独自の行動をとり、アーファーク派は清朝軍の援助を受け、イスハーク派からカシュガル、ヤルカンドを奪取する。『タズキラ・イ・ホージャガーン』は、アーファーク派の軍勢にヤルカンド郊外にまで追われて捕らえられるイスハーク派ホージャたちの悲劇的な結末で叙述を終えている(3)。

その後、清軍は1757年、再びイリに進撃し、アムルサナーはシベリアへ逃げて病没する。その2年後、清軍はタリム盆地全域を平定し、アーファーク派のブルハーン・アッディーン、ホージャ・ジャハーン兄弟が逃亡先のパミールで殺害された。その結果、名実共に清朝による新疆統治が開始される。

2.『タズキラ・イ・ホージャガーン』についての基本的事項

（1）著者ムハンマド・サーディク・カシュガリー

著者のムハンマド・サーディク・カシュガリーはその名からカシュガル出身者、ないし同地と関係の深い人物と思われるが、生没年やその生まれ育った環境や経歴は明らかではない。しかし、彼は本書以外に著作物を残しており、その内容から彼の著述家としての関心と力量をうかがうことができる。16世紀半ばにムハンマド・ハイダルによりペルシア語で書かれたモグーリスターン・ハーン国の歴史書 *Ta'rīkh-i Rashīdī*（『ラシードの歴史』）をチャガタイ語に翻訳していることから、この地域の歴史に関心をいだいていたことが分かる。さらに、

(2) 本稿においてモグール国とジューンガル王国の君主の在位年、没年や事件などの年代については、おおむね［濱田 1998; 若松 1971］の記述に基づいている。

(3) このイスハーク派勢力の最終的敗退は、1755年の終わりか1756年の初頭と考えられる［佐口 1948: 7; 佐口 1963: 45］。

Zubdat al-masā'il wa al-'aqā'id（『課題と信条の精髄』、チャガタイ語）ではイスラームの教義や法学に関する諸説をまとめ、*Ādāb al- ṣāliḥin*（『敬虔な者たちの礼儀』、チャガタイ語）では具体的な道徳を概論として説明している[4]。この二つの作品は彼のイスラーム学者としての資質の高さを示していよう[5]。

ムハンマド・サーディク・カシュガリーが活動した年代と地域は、その著作物の序文に記された後援者ないし作成依頼者の経歴からおおよそのことが判明する。『タズキラ・イ・ホージャガーン』と『課題と信条の精髄』それぞれの序文において、カシュガルのハーキム（都市長官または行政長官）であるウスマーン・ベグ（'Uthmān Beg）/ ミールザー・ウスマーン・ベグ（Mīrzā 'Uthmān Beg）が、後援者または作成依頼者として称賛されている［澤田 2014: 63; Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī 1314 [1897]: 4-6］。なお、ウスマーンがカシュガルのハーキム（ハーキム・ベグ）に在任した期間は 1778 年から 1788 年までである［河野 2013: 31］[6]。

さらに、ムハンマド・サーディク・カシュガリーは『ラシードの歴史』チャガタイ語訳の序文において、*Ta'rīkh-i Ṭabarī*（『タバリー史』）[7] をテュルク文（Türkī）〔すなわち、チャガタイ語 —— 澤田補足〕で記述したことを述べた後、エミーン・ホージャ・ワン・ベグリク（Emīn Khwāja Wāng Beglik）の息子イスカンダル・ワン・ハーキム・ベグリク（Iskandar Wāng Ḥākim Beglik）が、息子のユーヌス・タージー・ベグリク（Yūnus Tājī Beglik）とともに「ひとつの栄誉の座とひとつの王権の座」の上に坐り、ムハンマド・サーディク・カシュガリーに語り掛けたという言葉を記している。その言葉のなかに、「この『タバリー史』を我々の命令により、そなたはテュルク文に翻訳した」とあるので、イスカンダルまたはユーヌス、あるいはこの父子両者の命令により、ムハンマド・サーディク・カシュガリーが『タバリー史』をテュルク語に翻訳したことが分かる。そして、ペルシア文の『ラシードの歴史』をカシュガルで広く使用されているテュルク語に直すならば、庶民が容易に理解でき、「永遠に我々

---

(4) *Zubdat al-masā'il wa al-'aqā'id* の写本テキストは［Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī 1314 [1897] : 2-219］、*Ādāb al-ṣāliḥin* の写本テキストは［Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī 1314 [1897] : 221-285］に収められている。この二つの作品については、［Hofman 1969: 23-24］［Thum 2018: 21-22］も参照されたい。*Ādāb al- ṣāliḥin* はムガール朝インドの学者アブド・アルハック・ディフラヴィーによる同名作品の翻訳のようである。

(5) 1903 年にムッラー・ムーサーによって書かれた *Ta'rīkh-i Amniyya* によると、カシュガルにおいてマウラーナー・ムハンマド・サーディク Mawlānā Muḥammad Ṣādiq が *Zubdat al-masā'il* という名の書物を、ミールザー・ハディー・ベイセ・ベギム Mīrzā Hadī Beisä Begim の息子ウスマーン・ベイセ・ベギム 'Uthmān Beisä Begim の名に捧げて編んだという［Mullā Mūsā Sayrāmī: 14b］。ここでムハンマド・サーディク・カシュガリーはマウラーナーの称号が付けられており、優れた宗教学者であることを示しているように思われる。

(6) ウスマーンがカシュガルのハーキム職に就いていた時期の事件について『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編に記述があり、新免康氏により訳注がなされている［ジャリロフほか 2008: 171-173］。

(7) アッバース朝時代の著名な学者タバリー（923 年没）の浩瀚な歴史書『諸使徒と諸王の歴史』（アラビア語）からではなく、10 世紀後半のサーマーン朝宰相バルアミーによるペルシア語抄訳本（Bal'amī, *Ta'rīkh-i Ṭabarī*）から翻訳したものと思われる。そのペルシア語抄訳本については、［本田 1984: 622; Dunlop 1986: 984-985］参照。

とそなたの名前から名声はなくならず、すべての者が良き祈祷をなすはずだ」と語られている［Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī, *Ta'rīkh-i Rashīdī Tarjamasï*, C569: 7-9］。つまり、ムハンマド・サーディクはイスカンダルまたはユーヌス、あるいはこの父子両者の命令ないし依頼に基づき、この翻訳作品を書くことになったのである。

清朝史料によると、イスカンダル（伊斯堪達爾）は、いわゆるトゥルファン（吐魯番）郡王家の初代エミーン・ホージャ（額敏和卓）の子であり、1779年に第3代のトゥルファン郡王となったのち、1788年にカシュガルのハーキム・ベグ（阿奇木伯克）職を併任し、1811年に死去した［佐口 1986: 174-176; ジャリロフほか 2008: 174, 注 408］(8)。イスカンダルの長子であるユーヌス（玉努斯）は父死去の際に王爵を継承して第4代郡王となり、カシュガルのハーキム・ベグに任じられたが、コーカンド・ハーン国との交渉で罪を問われて1814年に郡王爵をとりあげられた［ジャリロフほか 2008: 176, 注 410, 411; 佐口 1963: 660, 注 115; 佐口 1986: 178］(9)。イスカンダルがカシュガルのハーキム・ベグに在任した期間は1788−1811年であり、その子ユーヌスの同職在任期間は1811−1814年である［河野 2013: 31-32］。

以上のようにムハンマド・サーディク・カシュガリーは『タズキラ・イ・ホージャガーン』と『課題と信条の精髄』のそれぞれの序文においてカシュガルのハーキム、ウスマーン（在任1778−1788年）を称賛している。そしてイスカンダル（カシュガルのハーキム・ベグ職在任期間1788−1811年）またはその子ユーヌス（カシュガルのハーキム・ベグ職在任期間1811−1814年）の命令ないし依頼により、『ラシードの歴史』をチャガタイ語に翻訳した。つまり、ムハンマド・サーディク・カシュガリーは18世紀の末から19世紀の初めにかけて、カシュガルにおいて著述にはげんでいたと考えられる。

（2）書名と写本

本書の書名（タイトル）は写本により違いが見られる。まず『タズキラ・イ・ホージャガーン』あるいは *Tadhkirat al-Jahān*（『タズキラ・アルジャハーン』）という名称が一部の写本群の序文に見える。筆者澤田はそれら6写本をBグループ写本と名付けている。それに対して別の写本グループの序文では *Tadhkira-i 'azīzān*（『尊師たちの伝記』）という書名が見られる。筆者はそれら10写本をAグループ写本と名付けている。両グループ写本の叙述内容は基本的には同じであるが、Aグループ写本はBグループ写本よりも飾り言葉のような表現や修辞をこらした文章などがかなり多く、異なったヴァージョンと考えられる［Sawada 2010; 澤田 2012］。

---

(8) イスカンダルのカシュガル統治について『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編に記述があり、新免康氏により訳注がなされている［ジャリロフほか 2008: 174-176］。

(9) ユーヌスの事績について『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編に記述があり、新免康氏により訳注がなされている［ジャリロフほか 2008: 176-177］。

筆者が日本語訳したテキストは、以下のBグループ写本を底本と対照写本にしたものである。

底　　本：ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支所（2007年から東洋写本研究所）（Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiiskoi Akademii nauk）D126写本

対照写本：Institut de France, ms. 3357写本、British Library, Or. 5338写本、British Library, Or. 9660写本、British Library, Or. 9662写本

（3）構成と内容

『タズキラ・イ・ホージャガーン』では序文のあとに、「物語の章。聞かなければならない」（Faṣl-i dāstān. Ishitmäk keräk.）または、それに類似する表現で内容の区切りが示されていくので、その表現を章の区切り、ないし章の題目とみなして構成を考え整理した（別表「『タズキラ・イ・ホージャガーン』の構成と内容」参照）。全部で 34 の章からなり、各章の内容は筆者が要約したものである。形式的な特徴として章の長さの不均衡を指摘することができる。最も長い章は、第 17 章の「物語の章。カシュガルについて聞かなければならない」であり、78 ページから 101 ページまでで、ページ数は 23 ページに及ぶ。最も短い章は、6、10、13、27 の四つの章であり、わずか 2 ページにすぎない。全体として、きわめてアンバランスなページの配分になっている。そして、このような不均衡は、歴代の指導者であったホージャたちを扱う章の数にもあらわれている（別表参照）。

3．『タズキラ・イ・ホージャガーン』における主要人物とその活動

（1）カシュガル・ホージャ家の系図と二党派の対立

カシュガル・ホージャ家の主要人物の血統[10]を図示すれば次のようになる。この図ではホージャやホージャム（khwājam / khōjam、「我がホージャ」の意）という敬称、愛称は省いている。また、一部の人物については、他の史料から分かる没年を付記した。

カシュガル・ホージャ家の成員は、先述したように、中央アジア、サマルカンドにおける

---

[10] カシュガル・ホージャ家の系図はすでに先行研究で示されているが、イスハーク派のシュアイブ、ダーニヤール兄弟の父の名前については、疑問点が残されている。『タズキラ・イ・ホージャガーン』の序文に載せられた血統（外形的系譜）によると、ホージャ・ダーニヤールはホージャ・アブド・アッラーの子であるが、同書の別の個所では、ホージャ・ダーニヤールとホージャ・シュアイブはホージャ・ウバイド・アッラーの子となっている［澤田 2014: 67, 86］。［Shaw 1897: 11; Hartmann 1905: 341］所載の系図では、ホージャ・ダーニヤールとホージャ・シュアイブの父はホージャ・ウバイド・アッラーであるが、この兄弟の父をホージャ・ウバイド・アッラーではなく、Khwāja Muḥammad ‘Abdullāh とする系図も提起されている［Brophy 2008/2009: 28］。ウバイド（‘Ubayd）とアブド（‘Abd）のアラビア文字での綴りは一字違うだけであるので、諸写本間の相違を綿密に検討する必要がある。ここでは［Shaw 1897: 11; Hartmann 1905: 341］の系図に従っておく。

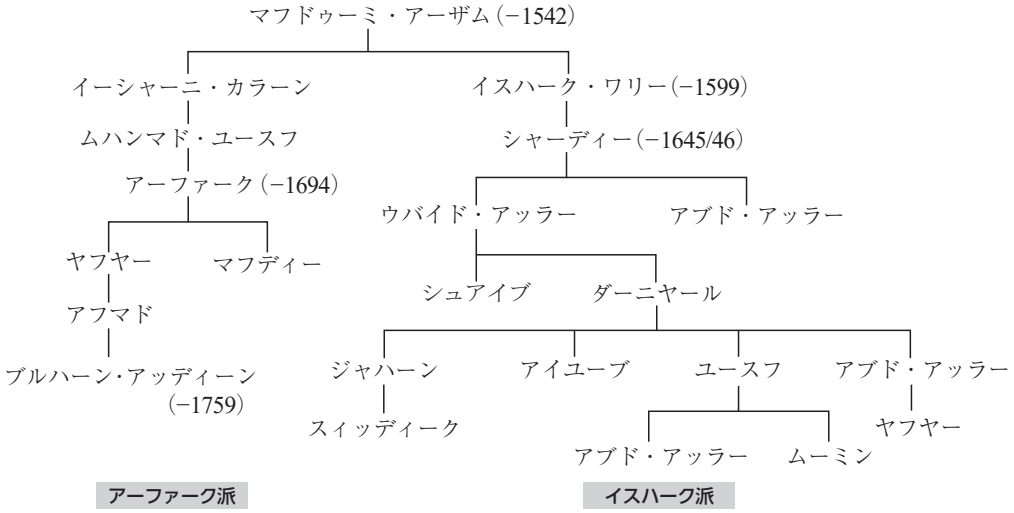

図　カシュガル・ホージャ家の系図

ナクシュバンディー教団の有名な指導者マフドゥーミ・アーザムの子孫であり、16世紀後半からタリム盆地に進出した。ただし、かれらは二つの党派を形成しながら宗教的な基盤を固めていった。マフドゥーミ・アーザムの第一夫人の第一子であるイーシャーニ・カラーンの子孫はアーファーク派あるいはイーシャーニーヤ派と呼ばれ、その異母兄弟のイスハーク・ワリーの子孫はイスハーク派と称し、この二党派はタリム盆地西部において対立し、カシュガル・ホージャ家として一つにまとまって活動していたわけではなかった。また、カシュガル・ホージャ家という表現も、『タズキラ・イ・ホージャガーン』をはじめ関係の史料に出てくるわけではなく、研究者によって用いられている呼称である。

この二党派が対立した背景あるいは原因として考えられる相違点は、道統、すなわち教導権の継承（師匠と弟子の関係）と、墓廟（拠点）の違いである。まず、道統の違いを見ておこう。マフドゥーミ・アーザムの最も著名な弟子は、ホージャ・イスラーム・ジューイバーリー（1563年没）（以下、ジューイバーリーと略記する）とマウラーナー・ルトフ・アッラー・チュースティー（1572年没）（以下、チュースティーと略記する）であった［Babadzhanov 1998a: 69］。アーファーク派は前者ジューイバーリーを、イスハーク派は後者チュースティーを経由してマフドゥーミ・アーザムから道統を受け継いでいる。すなわち『タズキラ・イ・ホージャガーン』によると、アーファーク派の始祖とみなされるイーシャーニ・カラーン（ホージャ・ムハンマド・エミーン）は、ジューイバーリーから系譜（nisbat）を受け継いだ［澤田 2014: 74-75］。それに対して、イーシャーニ・カラーンの異母弟でイスハーク派の名祖となるイスハーク・ワリーは、チュースティーから系譜を受け継いだのである［澤田 2014: 73-74］。

ババジャーノフ氏らの先行研究によれば、この著名な弟子二人、ジューイバーリーとチュー

スティーは師匠のマフドゥーミ・アーザムが1542年に亡くなると、教団指導権の後継をめぐり激しく対立し、教団の事実上の分裂につながった。そして、チュースティーはシャイバーン朝のタシュケントの支配者バラク・ハーン（ナウルーズ・アフマド）と緊密な接触を維持し、他方ジューイバーリーは、バラク・ハーンとマワランナフルにおける王座をめぐり争ったアブド・アッラー 2 世を全面的に支持した。アブド・アッラー 2 世がその争いに勝った結果、ジューイバーリーの影響力は強化され地理的に拡大したが、教団の一本化にはならず、チュースティーの支持者たちはマワランナフルの周辺地域（タシュケント、フェルガナ、ヒサール）で 20 世紀初頭にいたるまで活動を続けたという。そして、ジューイバーリーはアブド・アッラー 2 世が 1557 年にブハラを獲得するのに協力し、同市西南部のジューイバール地区を拠点とするジューイバール・ホージャ家と称される一族の始祖となった［Babadzhanov 1998b: 65-66; Babajanov 1999: 258, 261; Babadzhanov & Szuppe 2001: 37-37; 磯貝 2005: 245］。このようなジューイバーリー、チュースティー両勢力の宗教的で政治的な抗争がアーファーク派とイスハーク派の対立に大きな影を落としたと考えられる。

次に、二党派の墓廟ないし拠点の違いについて述べたい。『タズキラ・イ・ホージャガーン』によると、アーファーク派のホージャ・ムハンマド・ユースフはヤルカンドからの帰途イェンギ・ヒサールのトゥフルクという所で亡くなり、カシュガルから来たホージャ・アーファークがその遺体を持ち帰り、ヤグドゥ（Yāghdū）の地に埋葬した［澤田 2014: 85］。そして、ホージャ・アーファークも死後ヤグドゥという地に埋葬され、それ以後、人々はヤグドゥという本来の名を捨て、アッパク・ホジャ・マザール（阿帕克和加麻扎）と呼ぶことになった［Lyu 1987: 822; 劉 1985: 427］。これが、現今のカシュガル市中心から東北約 5 km の地に威容を誇るアーファーク派一族の墓所、アパク（アーファーク）・ホージャ廟［澤田 1999: 58-59］の起源である。この墓廟に信者が多く集まり活発な宗教活動を行っていた様子が、清朝征服直後に作成された史料に記録されている［佐口 1995: 64-71］ので、ホージャ・アーファーク埋葬以後アーファーク派の宗教施設として発展していったと考えられる(11)。

他方イスハーク派においては、イスハーク・ワリーの子ホージャ・シャーディーが 1645/46 年に亡くなり(12)、モグール国の第10代君主アブド・アッラー・ハーンによりヤルカンド市街地のアルトゥン（Altun、「黄金」の意）という墓地に埋葬され、そのマザール（墓廟）

(11) 佐口透氏が引用する故 J. Fletcher 氏の未公刊原稿によると、「アーファークの時代にイスハーキーヤ派〔イスハーク派〕が侵入してヤーグドゥ〔ヤグドゥ〕の墓所に放火したことがあった」という。また同じく、「アーファークの時代よりのち、ヤーグドゥのワクフ地は厖大なものとなり、種々の建物、特に主廟墓とその高い円屋根（グンベズ）、宿泊所、マスジド、池、薔薇園、果樹園が設けられた」という［佐口 1995: 70-71, note 7］。

(12) ホージャ・シャーディー（ホージャ・ムハンマド・ヤフヤー）は 1055 年（西暦 1645/46 年）に逝去したと、『シャー・マフムードの歴史』に明記されているが［Akimushkin 1976: Persian text, 70］、その没年を 1053 年（西暦 1643/44 年）とする説も提起されている［劉、魏 1998: 157, 159; Brophy 2008/2009: 18］。

の傍らに40人収容の修道場（ハーンカーフ）が建てられた。以後、その孫2人と曾孫2人がアルトゥンに葬られたことも『タズキラ・イ・ホージャガーン』から確認され、ホージャ・シャーディーの曾孫ホージャ・ジャハーンによってアク・マドラサという学院も建てられた［澤田 1996: 54-56］。元来アルトゥンはシャーディーが埋葬される以前からモグール国ハーン家の墓地であり(13)、そこへの埋葬はイスハーク派とモグール国君主との政治的な結びつきの結果であると考えられる(14)。

以上のことから、アーファーク派はカシュガルのヤグドゥ（現在のアパク・ホージャ廟の所在地）を、イスハーク派はヤルカンドのアルトゥンをそれぞれの宗教活動の主要拠点としていたとみなされる。

（2）ホージャたちの活動

次に、カシュガル・ホージャ家の代表的なホージャたちの活動、特に政治的な行状について『タズキラ・イ・ホージャガーン』の記述内容にしたがって見ていきたい(15)。

①ホージャ・イスハーク・ワリー

カシュガル・ホージャ家成員のなかで東トルキスタンに最初に足を踏み入れたのは、ホージャ・イスハーク・ワリーである。『タズキラ・イ・ホージャガーン』は第1章から第3章にわたって、彼の誕生から死去までの生涯を奇跡的なエピソードを交えて語っている。まず、神聖な資質を備えて誕生したことが父マフドゥーミ・アーザムの言葉を通じて表現され、幼年時からの言動にもそのカリスマ性が現われていることが暗示される。イスハーク・ワリーの神秘的能力の発揮された出来事が逸話として語られている、例えば、バルフに旅した時にその地の君主ピール・ムハンマドの王子が病気で死に瀕していたのを神への祈願で救ったという。また彼の祈願の結果として、カザーク（カザフ族）の地方において18の偶像寺院が壊れ、18万のカーフィル（不信仰者）がムスリムになったとされている(16)。このように『タズキラ・イ・ホージャガーン』は本文の劈頭においてホージャ・イスハーク・ワリーの神聖さや奇跡

(13) 初代のサイード・ハーン、その息子アブド・アルラティーフ・スルターン、第4代のムハンマド・ハーン、第5代のシュジャー・アッディーン・アフマド・ハーンなどハーン家成員のアルトゥンでの埋葬が確認される［澤田 1996: 55-56］。アルトゥン墓地は「黄金の氏族」たるチンギス・ハーン家の末裔にふさわしい名称である。

(14) モグール国の歴史書などによると、ホージャ・シャーディーはモグール国の第5代、第6代、第9代、第10代のハーンたちの即位に関与（援助）している。また、第6代、第10代のハーンたちの遠征軍にも同行している。このようにホージャ・シャーディーによりイスハーク派とモグール・ハーン家との強い政治的結びつきが形成された［澤田 1996: 48-54］。小沼孝博氏は、ムハンマド・ハーンがヤルカンド南方の軟玉の産地 *Kān-i sang-i qash*（「玉石の鉱山」）をホージャ・シャーディー（ホージャ・ムハンマド・ヤフヤー）に引き渡したことを指摘している［Onuma 2018: 39-40, note 31］。

(15) ホージャたちが関わった個々の事象や年代などの事実関係について、本節の叙述が『タズキラ・イ・ホージャガーン』の記述内容のみに限られていない場合のあることを予め断っておきたい。

(16) これはカザフ族ではなく、クルグズ（キルギズ）族の改宗を伝承したものである［澤田 1995: 153-159］。

的な能力を強調することによりその子孫、イスハーク派ホージャたちの正統性を示しているのであろう。

さて、イスハーク・ワリーはモグール国の第 3 代君主アブド・アルカリーム・ハーンの招きによりカシュガルに来たものの、ハーンの厚意を得ることはなかった[17]。しかし、ハーンの弟ムハンマド・スルターンが彼に帰依した。アブド・アルカリーム・ハーンの死後、ムハンマド・スルターンが即位すると（在位 1591/92－1609/10 年）、状況は改善したと思われる。『タズキラ・イ・ホージャガーン』はイスハーク・ワリーがヤルカンド、カシュガル、アクスに 12 年間滞在したと伝える。その後、イスハーク・ワリーはサマルカンドに帰り、そこで 1599 年に死去して埋葬された［澤田 1987: 70; 澤田 1996: 41-44］。

ホージャ・イスハークの活動は息子のホージャ・シャーディーによりヤルカンドにおいて受け継がれるが、不思議なことに『タズキラ・イ・ホージャガーン』はシャーディーの生涯についてごく簡単に触れているだけである。ただし注目されるのは、シャーディーがカシュガルにある自分に奉納された地所をアーファーク派（イーシャーニーヤ派）のホージャ・ムハンマド・ユースフに委ねたと『タズキラ・イ・ホージャガーン』が記していることである（第 4 章）。これが事実であるならば、イスハーク派、少なくともホージャ・シャーディーはカシュガルにおけるアーファーク派の活動を容認しており、時期は不明なものの、その時点での両派の対立はなかったということになる[18]。

②ホージャ・アーファーク

ホージャ・アーファークが父ホージャ・ムハンマド・ユースフとともにカシュガルに移住してくる。それはモグール国君主のアブド・アッラー・ハーン（在位 1638/39－1667 年）の治世下のことであったが、『タズキラ・イ・ホージャガーン』はその移住の詳しい経緯について全く語っていない[19]。ホージャ・アーファークは父とともに、アブド・アッラー・ハーンの長男でカシュガルを治めていたヨルバルス・スルターンやカシュガルの住民に受け入れられたものの、次第にヤルカンドのイスハーク派との対立が生じてくる。その背景には、ホージャ・アーファークと姻戚関係を結び親密な間柄となったヨルバルス・スルターンが、父ア

---

(17) ブローフィ氏によれば、イスハーク・ワリーは 994 / 1585-86 年にまだバルフにおり、1580 年代の終わりにヤルカンドに到来したという。さらに、マフドゥーミ・アーザムに精神的系譜の連なるホージャ・アブド・アルマンナーンが、イスハーク・ワリーの到来以前にアブド・アルカリーム・ハーンの宮廷で活動しており、ハーンにイスハーク・ワリーとの会見を拒ませたという［Brophy 2008/2009: 17, note 56］。

(18) アーファーク派のホージャ・ムハンマド・ユースフとイスハーク派との抗争については［濱田 1998: 108］で触れられている。

(19) ブローフィ氏の研究によると、ムハンマド・ユースフは、中国での滞在を含むであろう旅をしてからハミに落ち着き、そこで婚姻により、カラ・ハーン王家の子孫を称するカシュガル出のサイイドの家系の一員になり、長子のアーファーク・ホージャを含む三子をもうけたという。そして、ムハンマド・ユースフは 1640 年頃、息子たちとともに移動してカシュガルに近い村に居を定めたという［Brophy 2008/2009: 17-18］。

ブド・アッラー・ハーンを退位に追い込むなどハーン家内に紛争を起こし、その内紛にセンゲなどオイラト、ジューンガル王国の指導者たちが介入してくるという政治状況があった[20]。

このような紛糾の果てにモグール国の君主となったアブド・アッラー・ハーンの弟イスマーイール・ハーン（在位1670－1680年）は、ホージャ・アーファークをカシュガルから追放する[21]。追放されたホージャ・アーファークは、『タズキラ・イ・ホージャガーン』の記述によれば、カシュミールを経てチーン王国（Čīn mulki）のジョー（Jō< JV）という所に行き、そこのバラモンの師からカルマクのブシュド・ハーン〔ジューンガル王国のガルダン・ボショクト・ハーン〕への援助要請の手紙を書いてもらい、イリに持って行ったという。ジョーはチベットのラサを指していると考えられる。その手紙の要請に基づいて、ガルダンのジューンガル王国軍はカシュガル、ヤルカンドを攻略してアーファークを王座（takht）に就け、イスマーイール・ハーンをイリに連行する。先に述べたように、先行研究では1680年のこととされている。以後モグール・ハーン家王族の活動は散発的に見られるものの[22]、実質的には、ここにモグール国は滅亡したと考えてよかろう。

アーファークによる統治は、一時中断はあるものの、1694年に死去するまで続いた。しかし、アーファークの死後、その長男のヤフヤーと異母弟マフディーの母との対立抗争が生じ、ヤフヤーとマフディーの母が相次いで殺害されるという事態におちいり、不穏な状況が続く。

③ホージャ・ダーニヤール

ホージャ・アーファークの統治期にイスハーク派のホージャたちはヤルカンドから追われていたが、サマルカンドに難を避けていたホージャ・ダーニヤール（ホージャ・イスハーク・ワリーの曾孫）がフェルガナ盆地のフジャンドでの活動をへてヤルカンドに戻ってくる。彼はホージャの座（khōjalïq masnadï）に就き、さらにその後、ヤルカンドの統治の王座（takht-i salṭanat）に就く。しかし、カシュガルのアーファーク派の勢力との対立はクルグズ族やカザフ族を巻き込んで、戦いにまで発展した。恐らくそのような混乱状態を解消して支配を安定させるためにカシュガルとヤルカンドに進軍したジューンガル王国軍は、ホージャ・ダーニヤールをアーファーク派のホージャ・アフマドとともに連行する。その結果、ホージャ・ダー

---

[20] アーファークとヨルバルスの姻戚関係やヤルカンドのハーン位をめぐる騒乱については［Brophy 2008/2009: 17-18］を参照。

[21] 濱田正美氏によれば、イスマーイール・ハーンに追放されたアーファークは、「1671 / 72年に西寧へと向かった。途中チベットを経由して援助を求めたともいわれている」［濱田 1998: 108］。ブローフィ氏は、アーファークが青海、甘粛に滞在したことを確認し、さらにトゥルファンにおいてモグール・ハーン家のアブド・アッラシード（イスマーイール・ハーンの甥）と結びついたことの重要性を指摘する［Brophy 2008/2009: 21-22］。

[22] イスマーイールを退位させイリに連れ去ったガルダンは、アブド・アッラシードをヤルカンドで傀儡のハーンに立てた。その後、アブド・アッラシードはイリに拉致され、1696年ガルダンが康熙帝に敗北した際に清軍に降った。アブド・アッラシードの後にはその兄弟のムハンマド・アミーンがヤルカンドにおいてハーンに推戴されたが、1692年にアーファークの与党によって殺害された［濱田 1998: 109］。

ニヤールは 7 年間イリに住まわされる。

その後、カルマクの王族の娘から生まれたユースフ・ホージャムがダーニヤールの子であることが判明したのをきっかけにして、コンタージ〔コンタイジ、ジューンガル王国君主ツェワンラブタン、在位 1694－1727 年〕から四つの城市（ヤルカンド、カシュガル、アクス、ホタン）の王権（pādishāhlïq）がホージャ・ダーニヤールに与えられる。ホージャ・ダーニヤールはヤルカンドの統治の王座に就き、カシュガル、アクス、ホタンの各ハーキムにも命令を出して統治し、カルマクに税を納めていた。そして、7 年がこのように経った時、コンタージ、すなわちツェワンラブタンが毒殺されるという事件が起こり、その継承争いを処理した息子のガルダン･チェリン〔ガルダンツェリン、在位 1727－1745 年〕が即位するが、その後、ホージャ・ダーニヤールが死去し、アルトゥンに埋葬された。

④ユースフ・ホージャム

ダーニヤールの死後、カルマクはその 4 人の息子に上記 4 城市の王権を認めるが、ダーニヤールの第三子でカシュガルの統治を認められたユースフ・ホージャムは、ジューンガル王国の君主の交代にともなうイリにおける混乱を利用し、カシュガルにおいてカルマクからの独立をはかる。ユースフ・ホージャムはカシュガルの城壁を強化して武器を準備するだけでなく、フェルガナ盆地のアンディジャーンに使者を送り、諸州のハーキム、クルグズの首領などに援軍を求める。しかし、その後、ユースフは重篤な病状となり、カシュガルを 2 人の息子に任せ、ヤルカンドに移り、そこで死去した。

⑤ホージャ・ジャハーン

一方、ダーニヤールの第一子であるホージャ・ジャハーンは、父の死後ヤルカンドを統治したが、そこのハーキムのガーズィー・ベグに一時軟禁されるなど、ヤルカンド内での陰謀に苦慮する。このようなヤルカンド内での陰謀や裏切りの背景には、清朝の軍隊や一部のカルマクの援助を得たカシュガル・ホージャ家アーファーク派の活動があった。清朝軍のジューンガル王国征服とそれにともなうカルマク分裂の時に、アーファーク派のホージャ・ブルハーン・アッディーンはカルマクでの捕囚から解放され、カルマク、清朝の軍勢とともに、タリム盆地のアクス方面に進出していた。つまり、イスハーク派からタリム盆地西半部の統治権を奪うための行動であった。

このような動きに対し、ホージャ･ジャハーンの側はアーファーク派のホージャ･ブルハーン・アッディーン、カルマク、清朝の軍勢に対しウシュ、アクス方面にヤルカンド軍を派遣するが、敗北を喫する。ホージャ･ブルハーン･アッディーン側にカシュガルを奪われたユースフ・ホージャムの 2 子はヤルカンドに逃げ、ホージャ・ジャハーンと合流する。ホージャ・ブルハーン・アッディーン側の軍勢はウシュ、カシュガルで勝利を収めたのち、ヤルカンドを包囲攻撃するという局面にいたる。

結局、ホージャ・ジャハーンは、ハーキムのガーズィー・ベグの謀略などにより戦闘で敗れたイスハーク派一族とともにヤルカンド城市を捨てて逃走するが、途中で捕らえられる。『タズキラ・イ・ホージャガーン』はこのようなイスハーク派ホージャたちのヤルカンドからの悲惨な逃亡と捕縛についての叙述で終わる。このイスハーク派勢力の最終的敗退の時期は『タズキラ・イ・ホージャガーン』に示されていないが、先述したように、1755年の終わりか1756年の初頭と考えられる。

おわりに

以上のように『タズキラ・イ・ホージャガーン』はカシュガル・ホージャ家成員の伝記の体裁をとりながら、16世紀後半から18世紀の半ばまでのタリム盆地西半部で生じた政治的事柄について詳しく伝えている。それでは、聖者伝である『タズキラ・イ・ホージャガーン』が何故このように歴史書としての性格をも併せ持つことになったのであろうか。

『タズキラ・イ・ホージャガーン』の主眼は、その序文から分かるように、あくまでもイスハーク派ホージャたちの功績を語ることであった。しかし、ホージャ・アーファークをはじめアーファーク派のホージャたちの活動についても叙述がおよんでいる。これは、イスハーク派の歴代ホージャたちの事績を時系列にそって綴るためには、アーファーク派のホージャたちの活動にも言及する必要があったためであろう。特に、カルマク、ジューンガル王国の支配下に置かれるようになった経緯は、ホージャ・アーファークの行動を抜きにして語ることはできない。また最終的なイスハーク派の悲劇的な終焉も、アーファーク派のカルマクや清朝との結びつきを説明せねば理解できない。

しかしながら、そのようなアーファーク派ホージャについての叙述において同派に対する非難めいた言辞が見当たらないことにも注目すべきであろう。また、アーファーク派との対立抗争を本格化させたと考えられるホージャ・シャーディーの事績に、『タズキラ・イ・ホージャガーン』はほとんど触れていない。著者ムハンマド・サーディク・カシュガリーはイスハーク派とアーファーク派の対立抗争の実情に触れないよう配慮しているかに見える。

そして現実上、ホージャたちの活動の重点が宗教的なものから政治的なものに移っていったことも『タズキラ・イ・ホージャガーン』の性格を左右したであろう。イスハーク派はモグール国ハーン家との関係を深めることでその宗教的基盤を強化したと考えられるが、対照的にホージャ・アーファークはモグール国から追放されてカルマクと結びついた。このようなホージャたちの政治的な役割は、モグール国の滅亡後に特に強まったはずである。モンゴル帝国崩壊後も尊重されていたチンギス・ハーンの男系子孫による統治という原則（チンギス統原理）が失われていく転機において、新たな統合の原理が求められたと考えられる。そして、

ホージャ家以外にジューンガル王国の宗主権下においてタリム盆地西半部のオアシス地域の政治を広域的に担当できる勢力はなかった。つまり、ホージャに宗教指導者としてよりも政治指導者としての役割が強く求められ、ホージャもその役割を果たしたのである。そして、異教徒（チベット仏教徒）が君主であるカルマク、ジューンガル王国の宗主権下にあったことが、カシュガル・ホージャ家にムスリム指導者の統治という意識を強める結果になったのではないかと思われる。著者ムハンマド・サーディク・カシュガリーは、このようなホージャ家自体の政治化の現実を語らざるを得なかったのであろう。

表　『タズキラ・イ・ホージャガーン』の構成と内容

章の仮番号等	章題	主な内容
		D126写本の頁数 / 葉数
序文		神への賛辞。預言者ムハンマドの称賛。本書執筆の経緯。預言者ムハンマドからホージャ・ジャハーン（ホージャ・ヤークーブ）に至る血統。
		p. 2 / fol. 1b 〜 p. 8 / fol. 4b
1	物語の章。 聞かなければならない。	マフドゥーミ・アーザムの妻子。子のホージャ・イスハーク・ワリーの誕生、成長、バルフへの旅。
		p. 9 / fol. 5a 〜 p. 15 / fol. 8a
2	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・イスハーク・ワリーの道統。カザークの地方における布教。カシュガルへの招聘。アブド・アルカリーム・ハーンとムハンマド・スルターンの対立。
		p. 15 / fol. 8a 〜 p. 19 / fol. 10a
3	〔物語の〕章。 知らなければならない。	ホージャ・イスハーク・ワリーのヤルカンド、カシュガル、アクスにおける 12年の滞在。ブハラからドストゥム・スルターン軍のカシュガル攻撃。ホージャ・イスハーク・ワリーの死去とサマルカンドでの埋葬。
		p. 19 / fol. 10a 〜 p. 22 / fol. 11b
4	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・イスハーク・ワリーの 3子、特にホージャ・シャーディーの教導の位就任（ヤルカンド）。イーシャーニーヤ派のホージャ・ムハンマド・ユースフ、ホージャ・アーファーク父子がカシュガルへ移住。ホージャ・シャーディーの死去と埋葬。ホージャ・ムハンマド・ユースフの死去と埋葬。イスマーイール・ハーンによってホージャ・アーファークがカシュガルから追放される。ホージャ・シャーディーの子、ホージャ・ウバイド・アッラーが教導権を持つが、死去。
		p. 22 / fol. 11b 〜 p. 28 / fol. 14b
5	物語の章。 聞かなければならない。	カシュガルから追放されたホージャ・アーファークがジョーでのバラモンの師たちと出会い、その仲介でカルマクのブシュド・ハーン〔ジューンガル王国君主のガルダン・ボショクト・ハーン〕の援助を得る。ブシュド・ハーンの軍がカシュガル、ヤルカンドを攻略してアーファークを王座に就ける。イスマーイール・ハーンはイラ〔イリ〕に連行される。
		p. 28 / fol. 14b 〜 p. 30 / fol. 15b

章の仮番号等	章題	主な内容
		D126写本の頁数 / 葉数
6	物語の章。 聞かなければならない。	カルマクへの納税。ムハンマド・エミーン・ハーン（イスマーイール・ハーンの甥）が王座に就けられる。ムハンマド・エミーン・ハーンがイラの山で多数のカルマクを捕虜とする。同ハーンの妹ハーニム・パーディシャーがホージャ・アーファークに嫁ぐ。同ハーンの殉教。アーファークが再び王座に就く。
		p. 30 / fol. 15b ～ p. 31 / fol. 16a
7	物語の章。 この２人のマフドゥームザーダ、すなわち、ホージャ・シュアイブ・ホージャムとダーニヤール・ホージャムについて聞かなければならない。	ホージャ・シャーディーの２人の孫、シュアイブとダーニヤールがカシュミールに避難。ハーン寄進の土地からの収益とアルトゥン・マザール。スーフィー・ディーヴァーナによるシュアイブの殺害。ダーニヤールがサマルカンドに行き、高祖父マフドゥーミ・アーザムの墓と曾祖父イスハーク・ワリーの墓に詣で、フジャンドで首長となる。ホージャ・ヤークーブ（別名ホージャ・ジャハーンの由来）、フジャンドで誕生。
		p. 31 / fol. 16a ～ p. 36 / fol. 18b
8	物語の章。 ホージャ・アーファーク・アズィーズ猊下について聞かなければならない。	ヤルカンドの統治の王座に坐すアーファークとハーニム・パーディシャーの息子ホージャ・マフディーについて。アーファークの逝去、カシュガルのヤグドゥに埋葬。ハーニム・パーディシャーがホージャ・マフディーとともにヤルカンドにおいて、アーファークの長男ホージャ・ヤフヤー（別名ハーン・ホージャム）がカシュガルにおいて統治の王座に確乎となる。ヤルカンドの最上位の学者ミールザー・バラート・アーホンドがディーヴァーナたちにより殉教。ホージャ・ヤフヤーの殉教。ホージャ・ヤフヤーの３人の子のうち２人が殉教。１子ホージャ・アフマドがカシュガル北方のトョシュク山に避難。ハーニム・パーディシャーがホージャ・マフディーをハーンに推戴する。ハーニム・パーディシャーがディーヴァーナたちにより殺害される。
		p. 36 / fol. 18b ～ p. 39 / fol. 20a
9	物語の章。 聞かなければならない。	ムハンマド・エミーン・ハーンの弟アクバシュ・ハーンがヤルカンドに来て、千人のディーヴァーナを捕らえ殺す。カシュガルの人びとがトョシュク山からホージャ・アフマドを連れてきてハーンに推戴する。ホージャ・ダーニヤールがフジャンドからカシュガルを経てヤルカンドに来て、ホージャの座に坐る。ホージャ・マフディーがヒンドゥースターンに向かう。カシュガルの人びとがクルグズとともにヤルカンドを攻撃。カザークのハーシム・スルターンがヤルカンドに連れてこられハーンに推戴される。カシュガル側のクルグズがヤルカンド側に敗北。ハーシム・スルターンが退去し、ダーニヤールがヤルカンドの統治の王座に就く。
		p. 39 / fol. 20a ～ p. 43 / fol. 22a
10	物語の章。 イラ〔イリ〕について聞かなければならない。	カルマクがカシュガルを経てヤルカンドに進軍。ホージャ・ダーニヤールは戦わず、カルマクに服従。カルマクはカシュガルでホージャ・アフマドを捕らえ、ダーニヤールとともに連れ去る。以後７年間ダーニヤールはイラに、アフマドはイリ川上流部のエレン・カブルガに住まわされる。
		p. 43 / fol. 22a ～ p. 44 / fol. 22b

章の仮番号等	章題	主な内容 D126写本の頁数 / 葉数
11	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・ダーニヤールの息子ユースフ・ホージャの出自（カルマクの王族の娘が母）。コンタージ〔コンタイジ、ツェワンラブタン〕がホージャ・ダーニヤールに四つの城市の王権を与える。
		p. 44 / fol. 22b ～ p. 48 / fol. 24b
12	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・ダーニヤールがヤルカンドに戻り、統治の王座に就き、カシュガル、アクス、ホタンのハーキムを命令下におく。カルマクへの貢納。コンタージの死去とガルダン・チェリン〔ツェリン〕の即位。ホージャ・ダーニヤールの死去、アルトゥンに埋葬。カルマクがダーニヤールの 4 人の息子たちに四つの城市の王権を与える（第一子のジャハーンにヤルカンド、第三子のユースフにカシュガル、第二子のアイユーブにアクス、第五子のアブド・アッラーにホタン）。ホージャ・ジャハーンのヤルカンドにおける生活。ホージャ・ジャハーンがクトブ（枢軸）になること。ホージャ・ジャハーンの息子スィッディークについて。殉教の重要性について。ホージャ・ダーニヤールの第四子ハームーシュのイラにおける死去とヤルカンドのアルトゥンへの埋葬。
		p. 48 / fol. 24b ～ p. 65 / fol. 33a
13	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・アブド・アッラーとその夫人、4 人の息子の列挙。ホージャ・アブド・アッラー、アクスで死去、アルトゥンに埋葬。ヤルカンド、ホタン、アクス、ウチュ、カシュガルの各ハーキムの列挙。
		p. 65 / fol. 33a ～ p. 66 / fol. 33b
14	物語の章。 聞かなければならない。	ユースフ・ホージャムの人柄。イラへの往来。ユースフはカルマクの王が替わりイラが混乱しているのを利用して、嘘の口実（クルグズのカシュガル攻撃）を設けて、先ず息子のアブド・アッラーをイラからカシュガルに戻らせ、次いで自らもカシュガルに戻る。ユースフはムザト〔ムザルト峠〕でウチュのハーキム、ホージャ・スィー・ベグに遭遇する。
		p. 66 / fol. 33b ～ p. 74 / fol. 37b
15	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・スィー・ベグはユースフ・ホージャムがカルマクへの服従から脱しようとしていると疑い、カルマクの王ダバチ〔ダワチ〕に、ユースフをイラに戻らせるよう進言する。ダバチの命令によりダンジン・ジャイサンがユースフを追うが追い付けず、アクスに行き、そこのハーキム、アブド・ワッハーブ・ベグと会い、イラに戻るようにとの手紙をユースフに送る。ユースフは足の病を理由にイラに行くことを拒む一方、カシュガルの城壁を強化し武器を準備するなど、カルマクとの戦いに備える。
		p. 74 / fol. 37b ～ p. 76 / fol. 38b

章の仮番号等	章題	主な内容 D126写本の頁数 / 葉数
16	物語の章。 イラについて聞かなければならない。	カルマクの王、ガルダン・チェリン〔ガルダン・ツェリン〕の没後、息子のアジャンが王座に就く。もう1人の息子、ラマ・タージー〔ラマ・ダルジャ〕がアジャンから王座を奪う。ガルダン・チェリンの姉妹の子、アムルサナーとダバチがラマ・タージーを攻撃して殺す。ダバチが王となる。ダバチに敗れたアムルサナーは北京に行き、ハーン〔乾隆帝〕に兵を求める。アムルサナーは千の兵を与えられ、サルン・ジャン・ジュンとともに進軍する。ダバチはアムルサナーを恐れて、カシュガルには兵を送らずユースフ・ホージャムを戻らせたという。 p. 76 / fol. 38b ～ p. 78 / fol. 39b
17	物語の章。 カシュガルについて聞かなければならない。	カシュガルのユースフ・ホージャムに対する、カシュガル、ウチュ、アクス等に拠るベグ(豪族) たちの行動、とりわけ、カルマクに内通するベグたちの陰謀、カシュガルのイシク・アガ、フダー・ヤール・ベグの処刑。カルマクの使者たちは武装したユースフの勢力に圧倒され、カシュガルをあきらめてヤルカンドに向かう。ヤルカンドのハーキム、ガーズィー・ベグがカルマクの使者たちと策略をめぐらし、ユースフの長兄ホージャ・ジャハーンを監禁する。ホージャ・ジャハーンの息子スィッディーク・ホージャムは父の異変を知り、ヤルカンドからホタンに向かうとともに、カシュガルにいる叔父のユースフに事態を知らせる。スィッディークはホタンにおいてガーズィー・ベグの息子でホタンのハーキムであるウマル・ベグとその一族を捕まえ、ホタンの軍勢を率いてクルグズ(キルギズ) の兵とともにヤルカンドに向かう。 p. 78 / fol. 39b ～ p. 101 / fol. 51a
18	物語の章。 ムハンマディー・ミーラーフールについて聞かなければならない。	カシュガルのユースフ・ホージャムはムハンマディー・ミーラーフールにより、ガーズィー・ベグにその愚行を非難する手紙を送り、ホージャ・ジャハーンに危害を加えないよう警告する。またカシュガルのハーキムでホタン出身のフシュ・キフェク・ベグも手紙を送り、悪行をやめてホージャ・ジャハーンを統治の王座に坐らせることを求める。ホタンの親族を捕虜にされたガーズィー・ベグは、結局、ホージャ・ジャハーンに罪の許しを乞うことにする。 p. 101 / fol. 51a ～ p. 105 / fol. 53a
19	物語の章。 ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下について聞かなければならない。	ユースフ・ホージャムはカシュガルにおいて人々を鼓舞してカルマクから独立する動きを進める。そのムスリム軍は交易に来ていたカルマクを襲撃して追い払う。 p. 105 / fol. 53a ～ p. 108 / fol. 54b
20	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・ジャハーンはガーズィー・ベグの罪を赦し、ヤルカンドの統治の王座に確乎となる。 p. 108 / fol. 54b ～ p. 115 / fol. 58a
21	物語の章。 ユースフ・ホージャム・パーディシャーについて聞かなければならない。	ユースフ・ホージャムはアンディジャーンに使者を送り、その諸州のハーキムたち、クルグズたちの首領 (クバード・ミールザー)、ホージャ・ハサンの門弟たちにカーフィル(不信仰者) 〔カルマク〕との戦いへの援助を求める。 p. 115 / fol. 58a ～ p. 117 / fol. 59a

章の仮番号等	章題	主な内容 D126写本の頁数 / 葉数
22	物語の章。 聞かなければならない。	アクスのハーキム、アブド・ワッハーブ・ベグに捕らえられていたユースフ・ホージャムの夫人が救出され、カシュガルに来る。ユースフ・ホージャムは重篤な病状となり、カシュガルの統治を息子２人（アブド・アッラー、ムーミン）に任せ、父祖の眠る地、ヤルカンドへ移る。
		p. 117 / fol. 59a 〜 p. 123 / fol. 62a
23	物語の章。 イラの地について聞かなければならない。	アムルサナーとシナの軍（清軍）の進撃を前に、ダバチはイラからウシュのほうへ逃れるが、そこのハーキム、ホージャ・スィー・ベグに捕縛され、清朝皇帝のもとに送られる。この混乱した状況のもと、アクスのハーキム、アブド・ワッハーブ・ベグと弟のホージャ・スィー・ベグの献策により、カルマクは長年監禁していたアーファーク派のホージャたちをカシュガル、ヤルカンドの征服のために利用する。すなわち、ホージャ・アーファークの孫ホージャ・アフマドの２子、ホージャ・ブルハーン・アッディーンとハーン・ホージャムをその戦列に加える。ハーン・ホージャムはイラに留め置かれたものの、ホージャ・ブルハーン・アッディーンはカルマクやシナなどの部隊を率い、アクスを経てウシュに入る。
		p. 123 / fol. 62a 〜 p. 126 / fol. 63b
24	物語の章。	ヤルカンドからアクス、ウシュに軍を派遣することをホージャ・ジャハーンが許可する。その甥ホージャ・ヤフヤーが率いるヤルカンド軍はイェンギ・ヒサールを経てカシュガルに到る。
		p. 126 / fol. 63b 〜 p. 129 / fol. 65a
25	物語の章。 聞かなければならない。	ヤルカンド軍の出発２日後にユースフ・ホージャムが逝去する。ホージャ・ヤフヤーはカシュガルで哀悼の意を示し、ホージャ・アブド・アッラー（ユースフ・ホージャムの子）がカシュガルの王座に就く。そして、ホージャ・ムーミン（ホージャ・アブド・アッラーの兄弟）がカシュガル軍を率いてウシュへの遠征に加わる。両軍は合流して、ホージャ・ブルハーン・アッディーンのいるウシュの城市に近づく。
		p. 129 / fol. 65a 〜 p. 133 / fol. 67a
26	物語の章。 ホージャ・ヤフヤー猊下とホージャ・ムーミンについて聞かなければならない。	ホージャ・ブルハーン・アッディーン側の陣容（ベグたち・アーホンたち・スーフィーたちの名の列挙、トロムタイ大人と 400 人の中国人、ダンジン・ジャイサンと 1000 人のカルマク、タグリク）。ホージャ・ヤフヤーとホージャ・ムーミンの軍はホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍勢と戦って敗れ、ヤフヤーはヤルカンドへ、ムーミンはカシュガルへ敗走。
		p. 133 / fol. 67a 〜 p. 145 / fol. 73a
27	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・ブルハーン・アッディーンは、アブド・ワッハーブ、ホージャ・スィー・ベグの助言に従い、まずカシュガルへの進軍を決める。
		p. 145 / fol. 73a 〜 p. 146 / fol. 73b

章の仮番号等	章題	主な内容 D126写本の頁数 / 葉数
28	物語の章。 カシュガルについて聞かなければならない。	カシュガルの人びとがホージャ・ブルハーン・アッディーンの側に付きはじめる。ホージャ・アブド・アッラーは変心したアーホンのムッラー・マジードを殺し、ヤルカンドに向かう。ホージャ・ブルハーン・アッディーンがカシュガルに入り、統治の王座に坐る。クルグズのクバード・ミールザーがホージャ・ブルハーン・アッディーンの側に付く。ホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍勢がヤルカンドに向かう。
		p. 146 / fol. 73b 〜 p. 153 / fol. 77a
29	物語の章。 ヤルカンドについて聞かなければならない。	ホージャ・アブド・アッラーとホージャ・ムーミンがヤルカンドに入る。ホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍勢との戦いがヤルカンド城外で始まる。ホージャ・ブルハーン・アッディーン側の陣容（ベグ、アーホンなど人名の列挙）。ホージャ・ジャハーン側の陣容（人名の列挙）。ホージャ・ブルハーン・アッディーンからの使者がホージャ・ジャハーンに投降をうながす書状を渡すが、投降は拒否される。
		p. 153 / fol. 77a 〜 p. 170 / fol. 85b
30	物語の章。	ホージャ・ジャハーンも使者をホージャ・ブルハーン・アッディーンのもとに送り、カーフィル（不信仰者）〔カルマクと清軍〕に対し、協力して戦うことを求めるが、拒否される。ホージャ・ブルハーン・アッディーンはヤルカンドのハーキム、ガーズィー・ベグを懐柔してヤルカンド城市を取ろうと考える。
		p. 170 / fol. 85b 〜 p. 177 / fol. 89a
31	物語の章。 ニヤーズ・ベグ・イシク・アガについて聞かなければならない。	ヤルカンドのイシク・アガ〔ハーキムの副官〕、ニヤーズ・ベグがホージャ・ブルハーン・アッディーンの側の懐柔をうけ、ヤルカンドの城壁に坑道を掘るも、発覚する。
		p. 177 / fol. 89a 〜 p. 180 / fol. 90b
32	物語の章。	ホージャ・ジャハーン側の高官、アシュール・コズ・ベグがホージャ・ブルハーン・アッディーンと内通し城壁を壊そうとするも、発覚する。
		p. 180 / fol. 90b 〜 p. 186 / fol. 93b
33	物語の章。 ホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャムについて聞かなければならない。	勇敢なイナーヤト・ホージャム（ホージャ・ジャハーンの娘婿）の戦死。ガーズィー・ベグがホージャ・ブルハーン・アッディーンに内通する。ヤルカンド城外での戦闘。ホージャ・ジャハーンたちはヤルカンド城市を出てザラフシャーン河の方に避難するが、クルグズたちが待ち伏せをしている。
		p. 186 / fol. 93b 〜 p. 199 / fol. 100a
34	物語の章。 ガーズィー〔・ベグ〕について〔聞かなければならない〕。	ホージャ・ブルハーン・アッディーンが、逃走したホージャ・ジャハーンたちを追いに兵を発する。追手に対するホージャ・アブド・アッラーの奮戦。エルケ・ホージャム（ユースフ・ホージャムの子で、ホージャ・アブド・アッラーの弟）の殉教。ホージャ・ジャハーンたちが捕らえられ、ホージャ・ブルハーン・アッディーンのもとへ連れて行かれる。
		p. 199 / fol. 100a 〜 p. 219 / fol. 110a

参考文献

磯貝健一 2005「ジューイバール・ホージャ家」小松久男、梅村坦、宇山智彦、帯谷知可、堀川徹（編）『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社、245 頁。

河野敦史 2013「18 ～ 19 世紀における回部王公とベク制に関する一考察：ハーキム・ベク職への任用を中心に」『日本中央アジア学会報』第 9 号、19 - 48 頁。

佐口透 1948「東トルキスタン封建社会史序説：ホヂャ時代の一考察」『歴史学研究』134 号、1-18頁。

――― 1963『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』東京：吉川弘文館。

――― 1971「トルキスタンの諸ハン国」『岩波講座 世界歴史 13 内陸アジア世界の展開 II 南アジア世界の展開』東京：岩波書店、43-71 頁。

――― 1986『新疆民族史研究』東京：吉川弘文館。

――― 1995『新疆ムスリム研究』東京：吉川弘文館。

澤田稔 1987「ホージャ・イスハークの宗教活動：特にカーシュガル・ハーン家との関係について」『西南アジア研究』第 27 号、57-74 頁。

――― 1995「16 世紀後半のキルギズ族とイスラーム」『帝塚山学院短期大学研究年報』第 43 号、149-176 頁。

――― 1996「ホージャ家イスハーク派の形成：17 世紀前半のタリム盆地西辺を中心に」『西南アジア研究』第 45 号、39-61 頁。

――― 1999「タリム盆地周縁部イスラーム史跡調査報告」『帝塚山学院大学人間文化学部研究年報』創刊号、49-70 頁。

――― 2012「『タズキラ・イ・ホージャガーン』の諸写本にみえる相違：書名と系譜について」『西南アジア研究』第 76 号、72-85 頁。

――― 2014 ～ 2018「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注⑴～⑻」『富山大学人文学部紀要』第 61 号、59-86 頁、第 62 号、89-118 頁、第 63 号、33-57 頁、第 64 号、81-106 頁、第 65 号、21-44 頁、第 66 号、55-82 頁、第 67 号、31-60 頁、第 68 号、27-43 頁。

ジャリロフ・アマンベク、河原弥生、澤田稔、新免康、堀直 2008『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』東京：NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点。

濱田正美 1998「モグール・ウルスから新疆へ：東トルキスタンと明清王朝」『岩波講座 世界歴史 13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』東京：岩波書店、97-119 頁。

――― 2006『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』京都：京都大学大学院文学研究科。

本田實信 1984「イラン」『アジア歴史研究入門 第 4 巻 内陸アジア・西アジア』京都：同朋舎出版、593 - 662 頁。

劉志霄 1985『維吾爾族歴史（上編）』北京：民族出版社。

劉正寅、魏良弢 1998『西域和卓家族研究』北京：中国社会科学出版社。

若松寛 1971「オイラート族の発展」『岩波講座 世界歴史 13 内陸アジア世界の展開 II 南アジア世界の展開』東京：岩波書店、73-101 頁。

Akimushkin, O. F. 1976. *Shakh-Makhmud ibn Mirza Fazil Churas*, *Khronika,* Moskva: Nauka.

Babadzhanov, B. M. 1998a. “Makhdum-i A‘zam,” in S. M. Prozorov (ed.), *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii. Entsiklopedicheskii slovar’*, Vypusk 1, Moskva: Izdatel’skaya firma Vostochnaya literatura RAN, pp. 69-70.

——————— 1998b. “Lutfallakh Chusti,” in S. M. Prozorov (ed.), *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii. Entsiklopedicheskii slovar’*, Vypusk 1, Moskva: Izdatel’skaya firma Vostochnaya literatura RAN, pp. 65-66.

Babajanov, Bakhtiyor. 1999. “Mawlānā Luṭfullāh Chūstī. An Outline of His Hagiography and Political Activity, ” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 149, pp. 245-270.

Babadzhanov, B. M. & Szuppe, Mariya. 2001. “Dzhuibari,” in S. M. Prozorov (ed.), *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii. Entsiklopedicheskii slovar’*, Vypusk 3, Moskva: Izdatel’skaya firma Vostochnaya literatura RAN, pp. 36-38.

Brophy, David. 2008/2009. “The Oirat in Eastern Turkistan and the Rise of Āfāq Khwāja,” Th. T. Allsen, P. B. Golden, R. K. Kovalev, A. P. Martinez (eds.), *Archivum Eurasiae Medii Aevi*, 16, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 5-28.

Dunlop, D. M. 1986. “Bal‘amī,” in *The Encyclopaedia of Islam*. New Edition. Vol. 1, Leiden: E. J. Brill, pp. 984-985.

Fletcher, Joseph. 1978. “Ch’ing Inner Asia c. 1800,” in *The Cambridge History of China*, Vol. 10, Late Ch’ing, 1800-1911, Part 1, London, New York, Melbourne: Cambridge University Press, pp. 35-106.

Hartmann, Martin. 1905. “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choğas in Kašgarien.” *Der Islamische Orient. Berichte und Forschungen*, Pts. 6-10, Berlin: Wolf Peiser Verlag.

Hofman, H. F. 1969. *Turkish Literature: A Bio-bibliographical Survey*, Section III, Part I, Vol. 4: K-N, Utrecht: Library of the University of Utrecht.

Lyu Zishyaw. 1987. *Uyghur Tarikhi (Birinchi Qisim)*, Beyjing: Millätlär Näshriyati.

Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī. 1314 [1897]. *Zübdetü’l-mesā’il ve’l-‘aqā’id*. Istanbul: Hajj ‘Abbās Aqa Maṭba‘ası.

——————————— *Ta’rīkh-i Rashīdī Tarjamasï*, Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiiskoi Akademii nauk (Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi Akademii nauk), Rukopis’ C569.

Mullā Mūsā Sayrāmī. *Ta’rīkh-i Amniyya*, Bibliothèque Nationale, Collection Pelliot B 1740.

Onuma Takahiro. 2018. “Political Power and Caravan Merchants at the Oasis Towns in Central Asia: The Case of Altishahr in the 17th and 18th Centuries,” Onuma Takahiro, David Brophy, Shinmen Yasushi (eds.), *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations*, Tokyo: The Toyo Bunko, pp. 33-57.

Sawada Minoru. 2010. “Three Groups of *Tadhkira-i khwājagān*: Viewed from the Chapter on Khwāja Āfāq,” James A. Millward, Shinmen Yasushi, Sugawara Jun (eds.), *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20 th Centuries*, Tokyo: The Toyo Bunko, pp. 9-30.

Shaw, Robert Barkley. 1897. “The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the Taẕkira-i-Khwājagān of Muḥammad Ṣādiq Kashghari,” edited with introduction and notes by N. Elias, Supplement to the *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. 66, Part 1, pp. i-vi, 1-67.

Thum, Rian. 2018. “Moghul Relations with the Mughals: Economic, Political, and Cultural,” Onuma Takahiro, David Brophy, Shinmen Yasushi (eds.), *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations*, Tokyo: The Toyo Bunko, pp. 9-31.

（富山大学人文学部）

日本中央アジア学会 2017 年度大会プログラム

■概要

日程：2018 年 3 月 24 日（土）～ 3 月 25 日（日）
会場：KKR 江ノ島ニュー向洋

■プログラム

● 3 月 24 日（土）

13：00　受付

14：00～ 16：45　公開講演

新免康（中央大学）、塩谷哲史（筑波大学）
「タシュケント在住の一ウイグル知識人の歴史的記憶
　── 社会変動と越境」

澤田稔（富山大学）
「歴史書としての聖者伝
　── 16～18 世紀カシュガル・ホージャ家の伝記
　　『タズキラ・イ・ホージャガーン』の翻訳を終えて」

コメント：小沼孝博（東北学院大学）、秋山徹（早稲田大学）

公開講演共催

● 日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）
「19～20 世紀中央ユーラシアにおける越境と新疆ムスリム社会の文化変容に関する研究」

● 中央大学政策文化総合研究所プロジェクト・チーム
「ユーラシアの変動と日本：移動・交流と社会文化変容」

17：00～ 18：00　個人発表①

磯貝真澄（京都外国語大学）
「ヴォルガ・ウラル地域テュルク系ムスリム家族の法社会史研究の試み
――19 世紀末の婚姻簿から」

● 3月25日（日）
9:00～12:20　個人発表②

岩倉洸（京都大学）
「ポスト・ソビエト時代のアゼルバイジャンにおける国家と宗教
―― カフカース・ムスリム宗務局から見るイスラームの国家管理の諸相」

立花優（北海道大学）
「ポストソ連期グルジアにおける政党の意味
―― 下野後の統一国民運動 UNM の検討を中心に」

マフムドフ・ウミド（法政大学）
「日本の中央アジア外交に見る中露要因」

14：00～14：30　日本中央アジア学会総会

14:40～18:00　個人発表③

東田範子（東京藝術大学）
「カザフスタンにおける音楽伝承の再編成と音楽学者の役割
―― 1970 年代以降の展開」

庄司翼（京都大学）
「現代ウズベキスタンにおけるドゥアー」

和崎聖日（中部大学）
「旧ソ連・中央アジアのスーフィズムと病気治療
―― アフマド・ヤサヴィーの現代的意義に寄せて」

＊発表者の所属はいずれも発表時のものです。

公開講演

タシュケント在住の一ウイグル知識人の歴史的記憶
── 社会変動と越境 ──

新免 康*・塩谷 哲史**

本報告では、ウズベキスタン在住のウイグル知識人アマンベク・ジャリロフ氏に対する聞き取り調査に基づき、同氏の先祖に関する歴史的記憶と自らの歴史的経験･見聞に関するデータの概要を提示した上で、とくに中国領－ロシア帝国領・ソ連領の間で行われた「越境」の背景について検討した。その際、近現代における中央ユーラシアの政治的・社会的変動の文脈における新疆と中央アジアとの関係性に注目した。

アマンベク氏は1936年に新疆のグルジャ（伊寧）市で生まれた。その高祖父であるジャリルはイリ地域の出身で、ジャリル・ユズのユズ・バシであった。ジャリルの息子である曾祖父ブシュルベクは、1864年に発生したイリ地域のムスリム反乱に参加したと伝えられる。その息子である祖父ジャマールッディンは、1881年のサンクト・ペテルブルグ条約によるロシアから清朝へのイリ地域返還にともない、イリからロシア領セミレチエ地域に多数のムスリム住民が移住した際、アルマトゥの近くに移住して商売に従事した。息子のフサインベクは、アルマトゥのロシア学校で教育を受けたという。ジャマールッディンはロシア革命にともなう内戦期の混乱の中、1918年に息子たちとともにグルジャに移住した。フサインベクはグルジャ市内で金銀の取引に関係する仕事に従事した。以上のような父祖たちの歩んだ軌跡には、イリ地域－セミレチエ地域間における越境移動の実態の一端が反映されている。

グルジャで生まれ育ったアマンベク氏は、当地の近代的な初等・中等学校教育を受けた。そこで注目されるのは、この学校時代に中央アジア出身のウイグル人教師から影響を受けるとともに、タシュケントやアルマトゥで出版されたウイグル語定期刊行物や翻訳文学に親しんだという経験が、氏の知的背景の形成に一定の意味を持ったと推察されることである。他方、氏のグルジャでの学校時代は、1944年のイリを中心とした「三区革命」の勃発、そして1949年の中華人民共和国の成立、という大きな政治的変動の時期に当たっている。しかし、氏の受けた学校教育の内容について言えば、三区革命期におけるイスラーム関連科目の導入などを除き、少なくともグルジャにおいて顕著な変化はなかったという。グルジャでの中等学校卒業後、アマンベク氏は1952年にウルムチの新疆学院に入学してウイグル言語・文学

部で学び、卒業後の 1954 年 9 月から 55 年 8 月までウルムチの第二師範学校で教鞭をとった。

しかし、1955 年夏に大きな転機が訪れる。家族とともにソ連領に移住したのである。家族はアルマトゥにとどまり、氏は単身でタシュケントに来て、ニザーミー名称教育大学を受験し合格した。家族も時を経ずにタシュケントに移住してきたという。そして 1960 年大学を卒業すると、氏のアラビア文字表記ウイグル語の運用能力とウイグル文学の素養を認めた同大学教員で、科学アカデミー東洋学研究所の研究員であった人物の推薦で、同研究所に助手（laborant）として入所した。そして指導教員であったムハンマドジャン・ヨルダシェフの勧めで、ヒヴァ・ハン文書に基づくカラカルパク民族史の研究に従事してきた。タシュケント移住の理由として、1）スターリンが没する（1953 年）直前に中国領への移住者に対するソ連への帰還許可が出たこと、2）新疆農村部を中心に三反五反運動が始まり、「富農」に当たる父や自分の家族が標的になる可能性があったこと、3）ソ連への留学は当時新疆の若者たちの間で憧れだったこと、4）ソ連が作製したウズベク映画などを通じて、ムスリムとしての生活規範（飲酒の習慣がないことや服装など）が守られていたタシュケントの暮らしに親しみを感じていたことを挙げている。漢族に対する反感もあったが、それはむしろ氏がソ連国籍を持っていたことから、北京留学や新民主主義青年団への加入が認められず差別を受けたと感じたことに起因していたようである。1968 年にタシュケント在住のウイグル人女性と結婚し、1 男 2 女をもうけ、現在に至っている。

氏の語りは一種のサクセスストーリーをなしている。しかしそうした語りからも、内戦期の社会混乱、中ソ両国の社会主義社会建設期の変動に翻弄されたという話はうかがえなかった。むしろそうした変動を前に、早い段階での移住の決断が、移住後の生活の成功に結びついていた。またロシア帝国領・ソ連領の中央アジアと中国の新疆におけるテュルク系ムスリムの社会としての共通性、双方に社会的需要のある職能、氏の人間関係（親族ネットワーク、家族の職業仲間、幼いころソ連出身の教師たちに囲まれて教育を受けた経験）などが、越境移住を容易にしていたことも事実であろう。さらに氏の語りからは、ソ連の物質的近代化の進展や民族文化政策の成功の一端を知ることができるとともに、氏が身につけていたウイグル文学の素養がタシュケントでの社会的立場の確立につながったこともうかがえた。

（中央大学文学部*）
（筑波大学人文社会系**）

公開講演

歴史書としての聖者伝
── 16～18世紀カシュガル・ホージャ家の伝記『タズキラ・イ・ホージャガーン』の翻訳を終えて ──

澤田 稔

カシュガル・ホージャ家と通称されるイスラーム神秘主義者（ホージャの尊称で呼ばれる）の一族は、中央アジア、サマルカンドにおけるナクシュバンディー教団の指導者マフドゥーミ・アーザムの子孫であり、16世紀後半に東トルキスタンに進出した。その後、同家はヤルカンドに拠るイスハーク派とカシュガルに拠るアーファーク派に分かれて対立したものの、それぞれ宗教的に勢威を確立していった。著述家ムハンマド・サーディク・カシュガリー（Muḥammad Ṣādiq Kāshqarī）は清朝統治下の18世紀後半、イスハーク派の歴代指導者の行状を中心として『タズキラ・イ・ホージャガーン（ホージャたちの伝記）』（*Tadhkira-i khwājagān* / *Tadhkira-i ḫōjagān*）という書物をチャガタイ語（中央アジアのトルコ系文語）で書き上げ、同時代の記録は無論のこと、後世の史書も伝えていない貴重な情報を残した。

講演者・澤田は本書『タズキラ・イ・ホージャガーン』の写本に基づいてその日本語訳注をおこない、「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注」と題して『富山大学人文学部紀要』の第61号（2014年8月）から第68号（2018年2月）にかけて8回にわたり連載し、この度テキスト全文を訳し終えた。そこで本講演では、本書全体の構成と内容を整理したうえで、そこに含まれる情報の政治的側面を紹介するとともに、同書の持つ歴史書としての性格について考察した。『タズキラ・イ・ホージャガーン』はその書名に含まれる「タズキラ」という語が示しているように聖者伝のジャンルに入れられるが、濱田正美氏は東トルキスタンの聖者伝として、全くの空想の産物としての聖者伝と神秘主義的世界観に基づく事件史の聖者伝という二つの極端な違いのタイプ、そしてその両極端の中間に位置するタイプを指摘している。そのなかで、本書は事件史としての聖者伝、つまり歴史書としての聖者伝の代表であると言える。この伝記においては、聖者たちの宗教的な活動や奇跡的なエピソードよりも具体的な政治的事柄に主眼が注がれている。

本書で叙述される主要な地域は、タリム盆地の西半部、すなわちアクス、ホタンより西側、カシュガル、ヤルカンドにいたる地域である。16世紀初頭から18世紀半ばにかけてタリム盆地を統治、あるいは支配した国家は二つあった。すなわち、チンギス・ハーンの第二子チャ

ガタイの子孫が君主となりヤルカンドを首都としたモグール国と、17世紀の後半に天山山脈北方の草原地帯で形成された西モンゴル系オイラト族のジューンガル王国である。ジューンガル王国の英主ガルダンは1680年にカシュガル、ヤルカンドを攻略してタリム盆地の全域を支配下におき、その結果モグール国は滅亡する。そしてこの頃から、ジューンガル王国の宗主権下でカシュガル・ホージャ家がヤルカンドを中心にタリム盆地西半部を統治することになる。本書の叙述の大部分はこの時代のことを扱っている。なお、ジューンガル王国あるいはオイラト族は本書においてカルマクと呼ばれている。ガルダン以後、勢威をふるったジューンガル王国も18世紀半ばに君主位の継承をめぐり内紛が生じ、結局、1755年に清朝により滅ぼされる。その結果、ジューンガル王国の支配から解放されたカシュガル・ホージャ家は、二つの党派がそれぞれ独自の行動をとり、アーファーク派は清朝軍の援助を受け、イスハーク派からカシュガル、ヤルカンドを奪取する。本書は、アーファーク派の軍勢にヤルカンド郊外で追捕されるイスハーク派ホージャたちの悲劇的な結末で叙述を終えている。

『タズキラ・イ・ホージャガーン』の主眼は、その序文に述べられているように、あくまでもイスハーク派のホージャたちの功績を語ることであった。しかし、ホージャ・アーファークをはじめアーファーク派のホージャたちの活動についても叙述がおよんでいる。これは、イスハーク派の歴代ホージャたちの事績を時系列にまとめていくためには、アーファーク派のホージャたちにも言及する必要があったためであろう。ジューンガル王国の支配下におかれるようになった経緯は、ホージャ・アーファークの活動を抜きにしては語ることはできない。また最終的なイスハーク派の悲劇的な終焉も、アーファーク派とカルマクや清朝との結びつきを説明せねば理解できない。そして、ホージャたちの活動の重点が宗教的なものから政治的なものに移っていったことも本書の政治的側面に反映していると考えられる。ホージャたちの政治的な役割は、モグール国の滅亡後に特に強まったはずである。つまり、ホージャ家以外にジューンガル王国の宗主権下においてタリム盆地西半部のオアシス地域の政治を広域的に担当できる勢力はなく、ホージャに宗教指導者としてよりも政治指導者としての役割が強く求められたと思われる。本書が歴史書としての性格を強く持っているのは以上の理由からであり、それを書物としてまとめる力量が著述家のムハンマド・サーディク・カシュガリーにあったことも見逃すことはできない。

（富山大学人文学部）

ヴォルガ・ウラル地域テュルク系ムスリム家族の法社会史研究の試み
── 19世紀末の婚姻簿から ──

磯貝　真澄

ロシア帝国のヴォルガ・ウラル地域、より正確にはオレンブルグ・ムスリム宗務協議会管轄地域の、ムスリムの教区であるマハッラでは、ムスリム聖職者であるイマームらによって、教区簿（метрическая книга、教区簿冊）が作成された。これは出生簿、婚姻簿、離婚簿、死亡簿で構成され、そのマハッラの住民の出生、婚姻、離婚、死亡について記録したものである。本発表は、このムスリムの教区簿の史料としての特徴や利用法を確認する。特に、婚姻や離婚について、婚姻簿や離婚簿から得られる情報を法規範とあわせて分析することで、ムスリム家族の法社会史的な研究が可能であることを示す。

ヴォルガ・ウラル地域のテュルク系ムスリム（現在のタタール、バシキール）社会の研究で、村落地域に着目することの意義は、従来指摘されてきた。村落地域を対象とする社会史的な研究には、モスクやマドラサ等をめぐる「イスラーム的」な社会生活を解明するもの［Frank 2001; 2012］、文書館史料、特に統計資料を用いて多くの村落の簡略な歴史を記述するもの［Асфандияров 2009］、村落地域の個別の小都市や村落の歴史を詳細に明らかにするものなどがある［Гибадуллина 2010; Миронова 2015; Салихов 2015; Махмутова 2017］。家族史研究であれば、特にバシキールを対象に、家族の形態や、婚姻、出生、死亡、遺産相続等にかかわる儀礼、習慣、規範等の研究がある［Бикбулатов и Фатыхова 1991; Асфандияров 1989; Асфандияров 1997］。だが、教区簿は、有用性がつとに語られてきた史料であるにもかかわらず、こうした先行研究でも本格的に利用されていない。本発表は教区簿、特に婚姻簿と離婚簿に記された婚姻や離婚の記録を、ロシア帝国法のムスリム家族にかかわる規定やイスラーム家族法に由来する規範と対照させて分析する手法の可能性と、それによる研究の具体的な見通しを示す。

ロシア帝国で正教徒を対象とする教区簿は1722年に法制化され、1760～1770年代に全国で作成されるようになるが、ムスリムの教区簿は1828年9月21日セナート令「オレンブルグ・マホメット教宗務行政に関する教区簿使用の実施」で法制化された［Усманова 2015: 119; 高橋 2002: 27; ПСЗ РИ. собр. 2. Т. 3: № 2296, 21.09.1828］。そして、これに基づく『ロシア帝国法

律集成』第 9 巻「身分法集成」第 1606 条が定められ、ムスリムの教区簿の作成が続けられた［СЗ РИ 1857. Т. 9: Ст. 1606］。教区簿は、年始までに宗務協議会がマハッラのイマームにその冊子を 2 部ずつ配布し、イマームが 1 年間の教区民の出生、婚姻、離婚、死亡について 2 部に同様に記載した後、1 部をモスクで保存し、もう 1 部を宗務協議会に送付するという手続きで作成された。法文上、教区簿は出生簿、婚姻簿、死亡簿で構成され、婚姻簿に離婚も記録することになっていたが、19 世紀末の実際の教区簿は、出生簿、婚姻簿、離婚簿、死亡簿という構成だった。また、イマームが教区簿を「タタール語で」記述することは、法的に保障されていた。1893～1894 年に宗務協議会は、教区簿の取扱いについてより詳細な規則を定め、例えば婚姻簿に即時払いや支払期限付きの婚資の額、離婚簿に身請け離婚の際の身請けの対価の額を記載することなどを求めた［СЦ ОМДС: 96–99 (№ 54); 107–109 (№ 60)］。

1897 年のウファ県ベレベイ郡ビクメト村（現バシコルトスタン共和国トゥイマズィ地区ビクメトヴォ村）の婚姻簿を事例とすれば［НА РБ, Ф. И-295, Оп. 12, Д. 45: № 704, 11］、実際に作成された婚姻簿が、たしかに身分法や宗務協議会規則に従うものだったことがわかる。例えば婚資は、その全額と即時払いの額が記載され、支払期限付き婚資に相当する残額が新郎の債務であることが明記された。こうした婚姻簿を利用すれば、初婚年齢や地域的・身分的通婚圏、婚資の額、多妻婚、新郎新婦と後見人や代理人との関係等を明らかにできる。

同様に 1897 年のビクメト村や、他のベレベイ郡の村落の離婚簿を事例とすれば［НА РБ, Ф. И-295, Оп. 12, Д. 45: № 704, 21; № 697, 21; № 696, 21］、離婚簿もたしかに身分法や宗務協議会規則に従って作成されたことがわかる。また、実際に離婚簿に記載された離婚の外形は、宗務協議会の 1841 年 1 月 29 日規則等で法制化された［磯貝 2016］、イスラーム法の規範に基づくものだったと言える。離婚簿において、離婚する夫婦の名や身分、身請け離婚の際の対価等を記載する欄には概して、記載事項の単純な列挙ではなく、離婚当事者の 1 人称の承認や、申込みと承諾の文言、つまり法律行為の文言が記された。これは中央アジアのシャリーア法廷で作成された証書の文面に近いスタイルである。こうした離婚簿を史料とすれば、イスラーム法における離婚で、特にどの種のものがよく行なわれたか、身請け離婚の対価が何によって支払われたかなどを解明できる。すなわち、ムスリムの教区簿を法規範とあわせて分析すれば、ムスリム家族の法社会史的な研究を進展させることが可能なのである。

参考文献

НА РБ, Ф. И-295: Национальный архив Республики Башкортостан (бывший Центральный государственный исторический архив РБ), Ф. И-295 (Оренбургское магометанское духовное собрание).

ПСЗ РИ: Полное собрание законов Российской империи.

СЗ РИ: Свод законов Российской империи.

СЦ ОМДС: Сборник циркуляров и иных руководящих распоряжений по округу Оренбургского магометанского духовного собрания 1836 – 1903 г. Уфа: Губернская типография, 1905.

Асфандияров, Анвар З. 1989. *Семья и брак у башкир в XVIII – первой половине XIX в.: учебное пособие*. Уфа: Башкир. ун-т.

————————————. 1997. *Башкирская семья в прошлом: XVIII – первая половина XIX в*. Уфа: Китап.

————————————. 2009. *История сел и деревень Башкортостана и сопредельных территорий*. Уфа: Китап.

Бикбулатов, Наиль В. и Фатыхова, Флиза Ф. 1991. *Семейный быт башкир: XIX – XX вв.* М.: Наука.

Гибадуллина, Эльза М. 2010. *Татарская община в Бугульме в XVIII – начале XX вв*. Казань: Изд-во МОиН РТ.

Махмутова, Альта Х. 2017. *Колыбель моя, Бизяки*. Казань: Яз.

Миронова, Елена В. 2015. *Уездный город Тетюши во второй половине XIX – начале XX века*. Казань: Институт истории им. Ш.Марджани АН РТ.

Салихов Радик Р. 2015. *Служилая Ура: рождение татарского капитализма*. Казань: ИИ АН РТ.

Усманова, Диляра М. 2015. “Мусульманские метрические книги в Российской империи: между законом, государством и общиной (вторая половина XIX – первая четверть XX вв.),” *Ab Imperio* 2015 № 2. С. 106 – 153. (переиздано в книге: Бобровников, Владимир О. и др. (сост.) *Мусульмане в новой имперской истории: сборник статей*. М.: Садра. 2017. С. 339 – 389.)

Frank Allen J. 2001. *Muslim Religious Institutions in Imperial Russia: The Islamic World of Novouzensk District and the Kazakh Inner Horde, 1780-1910*, Brill: Leiden/ Boston/ Köln.

——————. 2012. *Bukhara and the Muslims of Russia: Sufism, Education, and the Paradox of Islamic Prestige*, Brill: Leiden/ Boston.

磯貝真澄 2016「19世紀後半～20世紀初頭のヴォルガ・ウラル地域のムスリムの婚姻・離婚と「イスラーム法」」、『第8回近代中央ユーラシア比較法制度史研究会』、静岡県静岡市（ふしみや会議室）、2016年12月4日。

高橋一彦 2002「ロシア家族法の原像――19世紀前半の法的家族」、『研究年報（神戸市外国語大学外国学研究所）』39号、1–73頁。

（京都外国語大学）

ポスト・ソビエト時代のアゼルバイジャンにおける国家と宗教
── カフカース・ムスリム宗務局から見るイスラームの国家管理の諸相 ──

岩倉 洸

本報告の目的は、アゼルバイジャンのムスリム宗務局である「カフカース・ムスリム宗務局」の活動の検討を通じて、ソ連崩壊後のアゼルバイジャンにおける国家と宗教の関係について明らかにするものである。従来、アゼルバイジャンのイスラーム研究はイスラーム学、政治学、人類学、社会学の面から多くなされてきた。特に人類学、社会学においては民衆イスラームとその信仰実践に焦点があてられてきた。しかし、このことは民衆イスラームの影響力を過大評価し、政府やそれに近いイスラーム組織の影響力を過小評価する状態を引き起こしている。政府やそれに近いイスラーム組織の研究は、近年の政治的イスラームやテロなど、国家と宗教に関する重要な問題を解決する鍵である。しかし、そのことが真剣に検討されてこなかった。本報告はアゼルバイジャンを対象にそのことを議論するものである。

そもそも、アゼルバイジャンのイスラームは、他の旧ソ連圏と異なる点も多い。歴史的にサファヴィー朝の支配下にあったことから、シーア派の12イマーム派が6～7割ほどを占めている（他地域はスンナ派ハナフィー法学派が多数である）。また、イラン的なイスラーム急進主義への警戒が強いのも特徴であろう。しかし、法規則によるイスラームの信仰実践の制限、宗務局をはじめとした管理機構の存在、文化的なイスラームの称揚と政治的なイスラームの排除、権威主義体制下での管理など他の旧ソ連圏と比較できるような点も多々ある。

一方で、アゼルバイジャンを含む旧ソ連圏ムスリム地域では「並行イスラーム論」という議論があった。これは、ソ連のイスラームでは宗務局が管理する政府公認のイスラームである「公式イスラーム」とそれに管理されていないスーフィー教団を代表とする民衆イスラームつまり「並行イスラーム」があり、人員などの問題で後者の方が民衆への影響力があるとされてきた議論である。この議論は現代のアゼルバイジャンでも問題になっており、ラウルやサッタロフといった研究者がこれを批判して、「並行イスラーム」の多様性を示している。しかし、それでもなお宗務局の影響力は限りなく過小評価されているのが現状である。

では、アゼルバイジャンにおいてイスラームを管理する機構とはどのようなものがあるだろうか。これには大きく分けて政府系機関とカフカース・ムスリム宗務局が存在する。前者

で特に重要なのは宗教団体担当国家委員会である。この、宗教団体担当国家委員会はイスラームのみならず、アゼルバイジャンのあらゆる宗教を管轄する組織であり、主に宗教団体登録と宗教的刊行物の検閲によって宗教規制を行っている。しかし、この委員会の構成員はイスラーム学の教育を受けていない者が大半である。そこで、イスラーム学の面からサポートする組織がカフカース・ムスリム宗務局である。カフカース・ムスリム宗務局とは、アゼルバイジャンにロシア帝国時代から存在する、国家的なイスラーム管理のために、体制に忠実なウラマーを集め、彼らにムスリムを管理させる組織である。イスラーム組織の登録、イスラーム法学者の教育、一般民衆へのイスラーム知識の伝達などを行っている。この2つの組織がアゼルバイジャンにおけるイスラーム管理の両翼なのである。

しかし、これらの組織はただ強権的にイスラームを管理しているわけではない。政府や宗務局はある1つの「宗教モデル」に基づいて活動を行っているのである。そのモデルとは、「スンナ派優遇」を実質的に行う政策を、「宗派共存」を目的として、「社会秩序の維持」を狙うものである。これを報告者は「アゼルバイジャン・モデルのイスラーム管理」と呼称した。このモデルに基づく活動として、本報告では宗務局を例に、宗教教育の宗派を超えたカリキュラム、両派の同一モスクでの礼拝推進、宗務局の構成員におけるスンナ派の優遇、シーア派限定の信仰儀礼の制限などを示した。モデルに基づくこうした活動は、ある程度宗派間の対立防止の効果を果たしているのである。ただしこうした活動は、スンナ派優遇が過ぎる、政府との癒着、イスラームの解釈の保守性などで人々から疑問視されている面もある。

結論として、アゼルバイジャンの国家と宗教の関係は、管理・被管理の関係にあるが、その一方で宗教側からの限定的な関与があると言える。それが「アゼルバイジャン・モデルのイスラーム管理」という形で現れているのである。カフカース・ムスリム宗務局はこのような関係の中で、イスラーム学の視点から国家と宗教の関係を仲立ちしている。これは管理・被管理という形で起こりうる緊張関係の緩和にある程度の効果を発揮していると言えよう。

本報告では、カフカース・ムスリム宗務局を中心的に検討したが、他政府組織の活動や他旧ソ連圏との比較などの点については触れることはできなかった。これらの点に関しては今後の課題としたい。

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

ポストソ連期グルジアにおける政党の意味
── 下野後の統一国民運動UNMの検討を中心に ──

立花 優

グルジアで2012年に実施された議会選挙では、当時の与党統一国民運動（UNM）が野党連合グルジアの夢（GD）に敗北し、UNMがその選挙結果を認めて政権を明け渡した。ソ連崩壊後のグルジアにおいて、初めて選挙によって政権交代が実現したという点でこの選挙は歴史的・画期的なもの・グルジアの民主化を促すものと評価された。しかしより注目すべきなのは、旧与党UNMが強固な野党第一党として選挙後もグルジア政治に一定期間残存したことである。ポストソ連期グルジアにおいては、旧政権与党が政権崩壊後も一定の勢力を保ってグルジア政治に影響を持ち続けることはなかった。さらに、与党との間で政権をめぐる競争が十分可能な、安定した組織を持つ野党が存続することもなかった。グルジア政治の民主度を分析するにあたっては、これらのことこそ重要ではないか。そこで本報告では、政権交代した2012年議会選挙の前後の旧与党UNMの動きを検討し、ポストソ連期グルジアにおける競争可能な、持続的な野党の存在について考察した。

報告ではまず2012年選挙までのUNM政権の状況を整理し、そのうえで2011年末のGDの登場後、グルジアにおける政治情勢がどのように変化したのかを概観した。2012年までのUNM政権は、2003年の「バラ革命」直後は民主的なイメージがあったものの、徐々に強権的な姿勢を露わにし始めた。民主制の確立よりも国家建設を優先順位の上位に置いたUNM政権は、分裂しまとまりを欠いた野党の状態（競争可能な野党の不在）にも助けられ、党派的な安泰を誇っていたのである。この状況が変化したのが、2011年のGD結成であった。かつてのUNM大口支援者であったイバニシュヴィリによる競争可能な野党ブロックの形成はUNMにとって脅威となった。

次に、政権交代が起きた2012年選挙の結果を概観し、結果が持つ意味を指摘した。2012年選挙ではUNMとGDの議席は比例割り当て分・小選挙区ともに伯仲し、GDが計85議席、UNMが計65議席でこの2党で全議席を占めることになった。すなわち、ポストソ連期グルジアにおいて、初めて「2大政党」時代とも言える状況が出現したのである。UNMは敗北したものの、「野党第一党」として次の議会選挙で政権を奪還し得る位置を占めることとなった。

第3に、上記のような状況の下で、UNMがどのような展望を持っていたのかを検討した。報告では、2016年2月にUNM所属国会議員（当時）に対して報告者が行ったインタビューから、UNMが当時抱いていた次期選挙に向けた展望を考察した。ここで、UNMが党内予備選挙を通じ、次期議会選挙に向けて新たな候補者の選定を進めていたこと、党の創設者であり指導者であったサアカシュヴィリ前大統領のウクライナ政界への転身後、主要幹部が「脱サアカシュヴィリ化」を進めようとしていたことを明らかにした。また、UNMが「選挙で負けても党を維持できること」をこれまでの与党との違いとして自己認識していたことも明らかとなった。一方、同時期に報告者が行ったGD幹部へのインタビューからは、GDが2012年の議会選挙において政権交代を実現するため「勝てる候補」の擁立を優先したこと、「反UNM・サアカシュヴィリ」の一点でまずは糾合したGDを、2012年以降の選挙の中で政党組織へと脱皮させようとしてきたことが明らかにされた。

2012年以降、次の議会選挙が実施される2016年までは、前述のようにGDとUNMの2大政党が支持を競う構図となった。複数行われた世論調査の中には、UNMの支持率がGDに肉薄する結果となったものもあった。しかし実際の選挙は小選挙区でUNMが全敗し、GDが計115、UNMが27という一方的な結果に終わった。報告では、この選挙ののちUNMが分裂していく過程を取り上げ、グルジアにおいて「競争可能な野党」が弱体化していることを指摘した。すなわち、選挙結果に対するUNMの対応について結果をボイコットするよう求めるサアカシュヴィリの国外からのメッセージをめぐり、UNMは当時の執行部ほか幹部のほとんどが離党、一方で党組織の大部は親サアカシュヴィリ路線で残存することになったのである。この分裂の結果、次点候補の惜敗率低下に見られるようにGDに対する野党の競争力は著しく低下することとなった。また、この分裂劇はUNMがサアカシュヴィリの個人政党的な性格を強く有していたことを晒す結果となった。

以上のように、2012年議会選挙以降のグルジアでは、政権与党と競争可能な野党が（旧与党という性格を有しているにもかかわらず）持続的に存在するかに見えたが、2016年議会選挙後の状況は「競争可能な野党の弱体化と与党の総取り」状態となっている。このことは、グルジアにおける民主制の安定にとって決してプラスとなるものではない。

（北海道大学）

日本の中央アジア外交に見る中露要因

マフムドフ・ウミド

ソ連崩壊後初めて、日本外務省の直接対象となった中央アジア諸国は、建国プロセスを全面的に進め、ポストソ連世界の新たなアクターとしての地位を確立した。

欧米諸国と並んで、日本も旧ソ連諸国の独立を承認し、中央アジア外交を展開した。当時、外務省 NIS 初代室長であった広瀬徹也によると、中央アジア外交は準備不足で始まったという。この時期を「走りながら考える」と名付けた広瀬は、外務省の専門家不足や官僚的問題を指摘している［宇山 2009: 4］。

確かに、冷戦時代日ソ関係の陰にあった中央アジア地域について、専門家及び研究者の育成問題があったといえる。これは東京の中央アジア政策立案にも影響している。

日本側には、中央アジア外交の目的とその意義について、未だに答えがない。資源外交や親日関係というスタンスから始まった関係は、一方的な「支援活動」に限られていた。

この状況を変えようとしたのは、橋本龍太郎の「ユーラシア外交」であった。橋本総理は、太平洋から見たユーラシア構想を打ち出し、極東における緊張関係を緩和させようとした。「ユーラシア外交」は、中国やロシア、更には米国や NATO、中央アジア地域をも含めた戦略的な構想であった。対露外交と対中央アジア外交を戦略的に結びつけた橋本総理は、中央アジア外交にも新風を吹き込んだ。円借款援助が開始され、要人往来も増えたことにより、中央アジア外交にはようやく「政治色」がついた。

同時に、日本国内では 1993 年に設立された「支援委員会」国際機関が政治家の鈴木宗男の影響もあり、対露外交の先端で活動していた。ロシアとの太いパイプを持った鈴木は、「支援委員会」を窓口に、日露平和条約の締結、及び中央アジア外交の活性化を狙った。

9.11 後、米軍基地の設置を巡る一連の交渉に参加した鈴木は、タジキスタンのラフモン大統領と会談し、ドゥシャンベのアフガン戦争への立場を変える。鈴木は、ロシアへの依存度の高いタジキスタンにおける日露連携を、領土問題の解決に反映させようと意図していた(1)。

(1)『東京新聞』, 2001年10月11日朝刊 4 頁。

上述のように、「ユーラシア外交」の狙いは、対露関係の改善であった一方、中国台頭への反応でもあった。これについて、元外相川口順子も言及している(2)。

日本と違って中国は、ソ連崩壊後中央アジアとの関係を積極的に発展させた。中ソ時代の「遺産」である領土問題の解決を狙った北京は、上海ファイブを形成した。同時に、新疆ウイグルの安全保障の観点から、ポストソ連地域の統合プロセスにも関心を寄せてきた。

上海協力機構のメカニズムを利用し、地域の現状を把握できる「窓口」を保有している。更に、2013年以降「一帯一路」国家戦略を打ち出し、その動きも本格化している。

従来、「一帯一路」構想に消極的であった日本も、最近前向きな姿勢を示している(3)。トランプ大統領の太平洋地域における政策は、東京の「出口戦略」を促進させた。AIIBについても、安倍総理は「公正なガバナンスが確立できるのかなどの疑問点が解消されれば、前向きに考える」と述べている(4)。東京は、「一帯一路」に参加することで、日中関係のみならず、日露、中央アジア外交をも活性化させることができる。ユーラシア地域を取り巻いた北京の国家戦略は、国際関係メカニズムの再編成を意味するものであり、東京の反応も注意が必要である。同時に、中国政府も日本の協力的な姿勢を歓迎している。

2004年、「中央アジア＋日本」という仕組みを導入した東京は、中露のような主要プレイヤーとの関係を重視しなかった。一時期、上海協力機構への関与を考えた日本には、積極性が足りなかった。その結果、「形式的」なメカニズムが誕生し、既存地域機構の補佐的役割に甘んじている。

経済的関心の小さい中央アジア外交の目的を明確にするには、「外交的関連性」を求めたプラグマチックな動きが重要である。「欧米陣営の一員」として、中央アジアを中露脅威から守るといった思考を捨てない限り、なにも変わらない。

安倍内閣は、対露外交の文脈の中で、中央アジア地域の位置づけを試みている。これについて、2015年10月の中央アジア歴訪、及び2016年12月のプーチン大統領来日の際にも、両首脳間の理解が得られている。しかし、「森友学園」など国内スキャンダルの影響で、安倍内閣の支持率が低下し、政権の安定性が問われている。安倍総理の再選問題は、対露外交と同時に、中央アジア政策にも影響するであろう。

最も重要なのは、政治的野心のないイメージを維持しつつ、日本ならではの協力のチャンネルを形成することである。中央アジアにおける中露の動きを批判するだけでなく、これを

---

(2) 筆者とのインタビュー、2017年6月1日。

(3) 詳細は , 首相官邸「第23回国際交流会議「アジアの未来」スピーチ」
URL: http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/statement/2017/0605speech.html, 閲覧日：2018年4月17日。

(4) 産経ニュース ,「安倍晋三首相 AIIB 参加「疑問解消されれば前向きに考える」 米との連携強調」
URL: http://www.sankei.com/politics/news/170516/plt1705160004-n1.html, 閲覧日：2018年4月15日。

「利用する」べきである。政策を立案する際に、偏見に基づいた資料作成ではなく、現実を反映させた戦略の策定が重要である。

参考文献

宇山智彦・クリストファーレン・廣瀬徹也編『日本の中央アジア外交――試される地域戦略』北海道大学出版会、2009 年。

（法政大学大学院政治学研究科）

カザフスタンにおける音楽伝承の再編成と音楽学者の役割
―― 1970年代以降の展開 ――

東田　範子

本発表では、ポスト・ソビエト期のカザフ伝統音楽界において、「伝統」のあり方が「遺産」として変容してきた過程とその歴史的背景を考察した。

ポスト・ソビエト期のカザフ伝統音楽界には文化復興的な動きが見られたが、その萌芽は1970年代に遡る。そこで重要な役割を担ってきたのは、当時の若きカザフ人音楽学者たちであり、音楽学的研究の発展および応用は、音楽界のあり方に根本的な影響を及ぼしてきた。彼女たちが確立してきた伝承方法とはどのようなものであり、またどのような背景の元で実践されてきたのであろうか。

1930年代に導入された音楽教育のソビエト的近代化により、カザフの伝統音楽と伝承体系にはさまざまな変容が起こった［東田 1999］。その一つは、五線譜の導入である。元来口承で伝えられてきたカザフ音楽は、制度化された音楽教育機関の中で、五線譜によって教育されるようになった。1950年代以降は、読譜と聴音の訓練であるソルフェージュの授業が音楽教育機関に導入され、西洋音楽専攻の学生だけでなく、カザフ音楽専攻の学生にもその履修が課された。

1972年、カザフの弦楽器ドンブラの演奏者兼研究者であったアマノフは、「ドンブラ専攻学生のソルフェージュは民族的概念に基づく独自の内容であるべき」との考えから、ドンブラ・ソルフェージュという科目をアルマティ国立音楽院にて開講した。この科目は、表向きは学生たちの読譜能力を向上するというものであったが、実際は、音楽院における実技教育から取りこぼされていた知識や技術を補完する意味を持っていた。具体的には、地方様式の分析、音楽家たちの系譜の伝承、即興の訓練等が行われ、ソルフェージュという概念を超えた包括的な内容が教えられた。教員は常に音楽学者から選ばれ、ドンブラ・ソルフェージュの授業は演奏専攻の学生と音楽学者の交差する場となった。このことは、後に、演奏家自身が音楽学的視点を獲得していく契機となってゆく。ドンブラ・ソルフェージュは、演奏界においては周縁的な存在でありながらも、音楽教育機関において次第に普及していった。2011年には、「自民族の」という接頭語を冠したエスノソルフェージュ（этносольфеджио）に改名

され、音楽教育機関においてカザフ音楽を専攻する全学生の必修科目に認定されるに至った［Альпеисова 2012］。

もう一つの興味深い事例は、集団教育用に新しく整理された口頭伝承法である。1995 年、上述のエスノソルフェージュを教えてきた音楽学者とドンブラ奏者のラインベルゲノフ夫妻が、アルマティ市に私立学校コキル（Көкіл）を開校した。その独自の理念の一つは、カザフの伝統音楽を、音楽専攻ではない児童たちの必修科目とすること、そして、楽譜を使わず口承でそれを行うことであった。ラインベルゲノフ夫妻は、音楽家のバイボスノヴァと協力して、カザフ音楽を一般児童に教えるための教科書／カリキュラムを考案し、「ムラゲル（Мұрагер бағдарламасы）」と名付けた。「ムラゲル」とは「継承者」を意味する。「ムラゲル」の核心は、民謡や叙事詩、器楽曲などカザフ伝統音楽のさまざまなジャンルを口承で教えることだが、加えて、それらに関する体系的な知識――作者の伝記的情報、地方様式の特徴、各曲にまつわる伝説、楽器の起源と特色など――もまたカバーされており、そこには音楽学的な視野が活かされている。

開校以来、国から援助を得られなかったコキルは、1990 年代末以降のグローバルな文化保護の傾向に機を得て、ソロス財団、ユネスコ、アガ・ハーン財団等から支援を受けることに成功した。そして、現代に口頭伝承を継承する学校として、次第に国際的な注目を浴びるようになった。この流れは、2014 年にカザフの器楽キュイがユネスコの無形文化遺産に認定されたこととも無関係ではないだろう。現在、コキルは一般向けの音楽教室を開校し、一般市民や外国人にも口承でドンブラを教えている。

音楽学者ロンストレムによると、「伝統」がローカル性や失われた古さを志向するのと対照的に、「遺産」は空間・時間に左右されない実践性、典型化・均一化を目指すという［Ronström 2014］。上記二つの伝承･教育方法は､音楽学的観点の介入によってシステマティックな再編成を経たことで、ローカル性を越えた復興的文化の共有を可能にし、遺産としてのカザフ音楽のあり方を方向づけていると考えられる。

これらの伝承方法が、音楽の担い手と受け手にとってどう受容されているのか、また、このような伝承方法が個人の音楽生活にどのような影響を及ぼしているのかについては、今後の現地調査によって明らかにしていきたい。

参考文献

Альпеисова, Г.Т. 2012. *Этносольфеджио в Казахстане: история, теория и практика*. Астана: Мастер По.

Ronström, Owe 2014. “Traditional Music, Heritage Music,” *The Oxford Handbook of Music*. New York:

Oxford University Press, pp. 43-59.

東田範子 1999.「フォークロアからソヴィエト民族文化へ――『カザフ民族音楽』の成立（1920-1942）」『スラヴ研究』46、1-32頁。

（東京藝術大学大学院音楽研究科）

現代ウズベキスタンにおけるドゥアー

庄司 翼

ドゥアーについての定義はいくつか存在し、その意味範囲はドゥアーを扱っている文脈ごとに異なる場合が多い。

日本国内の学術的な環境における一般的な理解としては、ドゥアーを「定めの礼拝の他に行われる自由な祈り」[大塚 2002: 664] とするものである。様々な規則があり様式化されている定めの礼拝（サラート、ナマーズ）と比較し、ドゥアーを個人的かつ自由な祈りであるとしている。この意味ではサラート以外のイスラームにまつわる様々な儀礼がドゥアーに含まれうる。

一方で、現代ウズベキスタンにおける権威的なウズベク語辞典 [Мадвалиев 2006: 665] では「神に請い、自身もしくは他者のために良いことを希望すること」といった内面に着目した定義に加え「ファーティハ（fotiha）で読まれるクルアーンの章」のように、章句そのものをドゥアーとする定義も加わる。ここでは、祈りという動作をドゥアーとしているのではなく、その内面の在り方（希望すること）と祈りの際に読まれる文章（クルアーンの章句）の両方がドゥアーであるとされている。

また近年出版されたイスラーム百科事典 [Мансур 2017: 148] では、宗教的な立場よりドゥアーを二種類に分類し、以下のように説明する。すなわち、クルアーンやハディースなどの宗教的な源泉に出典を見出すことのできる文言で行われるドゥアーは マアスーラ、それらによらず自由な文言で行われるドゥアーがムフタラーである。そのうえで、マアスーラのドゥアーに関してはその文言を間違えぬことが大事であるとし、ムフタラーのドゥアーに関してはアッラー以外の対象に対して「子供を得る」「病を癒す」「災難や死から自らを守る」「公平や正義を求める」などの願いをかけることで多神崇拝に陥ってしまうことを戒めている。また、ドゥアーを行う際の精神的な在り方にも言及し、それが単なる願い事とならぬよう注意を促している。

一方で民族学の立場からは、シャーマニズム的な要素も含んだドゥアーにウズベク民族の民族性が現れているとした研究 [Мирзаева 1993] も残されている。この研究では特に詩か

ら引用したドゥアーなどにも触れており、ドゥアーとされるものの中には抒情詩、叙事詩などに分類可能なものが含まれることが指摘されている。

現代ウズベキスタンの街中で実際に目にするドゥアーとしては、旅行のドゥアーと台座の節を挙げることができる。どちらも身の安全を請願すべく読まれるものであるが、クルアーンに出典を求めることのできるドゥアーであり、先程の分類で言えばマアスーラである。そのことからも分かるようにこのドゥアーは全てアラビア語であり、このドゥアーを読むにあたってはウズベク人であれアラビア語で話すことが求められる。これは多くの人にとって容易ではないため、このようなドゥアーは本などでは拡張キリル文字での転写が併記されている。

以上からも分かるように、「ドゥアー」には出典を異にする多くのタイプがあり、それがどのような性格のドゥアーであるかは実際に聞いてみるまで判然としない。加えて、クルアーンやハディースに典拠を持つマアスーラの場合はドゥアーそのものがアラビア語である場合が多く、アラビア語を解さない多くのウズベク人にとっては、そのままでは理解することのできない呪文のようなものにならざるをえない。その際は宗教的な知識人によるドゥアーの説明や、何らかの出版物から得られる情報を信頼せざるをえないということになるが、その過程で宗教的な権威は重層的となる。故にある人がどの部分を主たる宗教的権威として信頼しているのか、言い換えれば何を根拠としてその効力を信じられるのかを探るのは単純なことではない。

一方で、ドゥアーは基本的に自由な祈りであり、時代の流れの中で絶えず人々による増減や改変を繰り返しうるものである。それ故にドゥアーをどのように行うかということには、それを行う個々人の宗教観が反映されるのではないかと考えられる。したがってドゥアーを人類学的に分析していくにあたっては、どのようなドゥアーを行ったのか、誰からそれを学んだのか、それを行うことにどのような意味があるのか、などを丹念に見ていくことが大切になってくるだろう。

参考文献

（日本語）

大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店。

（ウズベク語）

Зиёуддин, А. 2011. *Катта дуо ва зикр китоби*, Тошкент: Шарқ.

Мадвалиев, А. ред. 2006. *Ўзбек тилининг изоҳли лугати, Биринчи жилд А-Д*, Тошкент:

«Ўзбекистон миллий энциклопедияси» Давлат илмий нашриёти

Мансур, А. ред. 2017. *Ислом энциклопедия: А-Ҳ*, Тошкент: «Ўзбекистон миллий энциклопедияси» Давлат илмий нашриёти

Мирзаева, С. Р. 1993. *Ўзбек халқ афсун-дуоларининг жанр хусусиятлари ва бадиийлиги*, Тошкент: Филология фанлари номзоди илмий даражасини олиш учун тақдим этилган диссертация автореферати

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

旧ソ連・中央アジアのスーフィズムと病気治療
―― アフマド・ヤサヴィーの現代的意義に寄せて ――

和崎　聖日

本報告では、旧ソ連・中央アジアを対象に、病気治療を目的とした「ジャフル（jahr）」と呼ばれるスーフィズムの儀礼を取り上げた[1]。この儀礼は「声高のズィクル（jahri zikr/ zikri jahr）」の一種と考えられる。そこでは、独特の調息法とともに、12世紀の高名なスーフィー、アフマド・ヤサヴィー（?–1166/67）[2]によるテュルク語詩などが治療者によって謳われる。ここでの「治療者」とは、アフマド・ヤサヴィーを師（pir）と仰ぎ、また対象となる地域社会で世襲によって「スーフィー」となる男性を指す。すなわち、本報告で取り上げた事例の場合、アフマド・ヤサヴィーの伝統は、タリーカとしてではなく、「民間信仰」的なスーフィズムとして存在している点に特徴があった。本報告では、ソ連時代の反スーフィズム政策を概観したうえで、映像記録も交えながら、ジャフルの儀礼が当時いかに実践され続けたのか、またそれが今日において実際にどのように行われているのかについて詳しく紹介することを目的とした。この目的の解明をとおして、中世のスーフィー、アフマド・ヤサヴィーの存在がソ連解体後の中央アジアにおいてどのような位置を占めているのかについても本報告では考察を試みた。

本報告では、結論として以下の２点を明らかにした。第１に、治療者であるスーフィーたちと病人として彼らのもとを訪れた高齢男性へのインタビューから、ソヴィエト近代化のプロパガンダの影で近代医療の恩恵を十分に受けることができなかった中央アジアの山岳地帯など僻地の一部においては、タジク人のスーフィーたちがジャフルの儀礼をとおしてジンを操り、人びとを治癒し続けてきたことを明らかにした。また、そこでのスーフィーが現地の

---

(1) 本報告が取り上げたフィールド資料は、2016年8月と2017年8月に中央アジアの現地研究者と共同で実施した調査に基づいている。

(2) アフマド・ヤサヴィーは、周知のとおり、現代のカザフスタン共和国南部に位置するサイラム市出身のスーフィーである。彼は、当時の民衆に愛された単純な韻文形式の詩を用いて、従来アラビア語とペルシャ語で表現されてきたスーフィズムの思想を、中央アジアのテュルク系諸民族の言語であるテュルク語でわかりやすく表現した。そのことによって、彼は中央アジアの特にテュルク系遊牧民のイスラーム化に尽力したことで知られる［堀川 1995: 267-304］。

ムスリム住民から「名医」として頼られ続けてきたことも指摘した。だからこそ、ジャフルの儀礼はソ連時代の反スーフィズム政策の中でも密かに実践され続けたと考えられた。第２に、実際のジャフルの儀礼では、４代正統カリフやハナフィー学派の名祖アブー･ハニーファ（699?-767）、中世のナクシュバンディー教団の高名な指導者マフドゥーミ･アーザム（1461/2-1542/3）[3] らへ向けたドゥアーがなされた後、神への愛を謳うアフマド・ヤサヴィーのテュルク語詩や預言者ムハンマドを讃美する作者不明のタジク語詩などが朗詠され、また独特の調息法とともにアッラーの99の美名（の一部）が連祷されることを示した。そこではまた、スーフィーがジンを追い払う目的で病人を鞭打つ姿も認められた。このことのシャリーアにおける合法性について、その根拠が預言者ムハンマドとアフマド・ヤサヴィーによる病人への鞭打ちに関する伝承にあるとするスーフィーの語りも紹介した。この点について補足すれば、ジャフルの儀礼の核となる知識と行為の源泉がとりわけアフマド・ヤサヴィーにあると強調されることも明らかにした。以上のことから、中央アジアの山岳地帯など僻地の一部ではソ連解体後の今日に至るまで中世の高名なスーフィー、アフマド・ヤサヴィーに起源をもつとされる伝統（ジャフルの儀礼）が「病気治療の文化」として絶大な信頼を寄せられ、また実践され続けていることが、彼の存在の現代的意義であると考えられた。本報告では、ジャフルの儀礼がソ連時代の対スーフィズム政策の中で置かれた位置づけについて、公文書などに依拠しながら正確に論じることができなかった。これを今後の課題としたい。

参考文献

堀川徹 1995「中央アジアの遊牧民とスーフィー教団」堀川徹編『世界に広がるイスラーム：講座イスラーム世界３』東京：栄光教育文化研究所、267-304頁。

（中部大学全学共通教育学部）

[3] 調査の対象となったスーフィーたちによれば、アフマド・ヤサヴィーを師と仰ぐスーフィーがマフドゥーミ・アーザムなどナクシュバンディー教団の高名な師たちへの敬意の表明をドゥアーにおいて欠かさない理由は、両者の思想潮流の起源が共通の師であるユースフ・ハマダーニー（?-1140）に遡るからである。

中央アジアにおける帝国医療研究の射程
── アンナ・アファナシエヴァ氏のセミナー報告 “Imperial Laboratory: Russian Anti-Plague Campaigns in the Kazakh Steppe in the Early Twentieth Century” から ──

井上　岳彦

本稿は、2017年10月24日（火曜日、18：00～20：00）に、ルートヴィヒ＝マクシミリアン大学ミュンヘン（以下、ミュンヘン大学）で開催されたセミナー報告にもとづくものである。報告者のアンナ・アファナシエヴァ氏（Анна Эдгардовна Афанасьева）は、ロシア・モスクワにある国立研究大学高等経済学院（Национальный исследовательский университет «Высшая школа экономики»: National Research University – Higher School of Economics）の人文学部文化学院の准教授を務めている。彼女は学術誌 *Ab imperio* や *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*、論文集などで、ロシア帝国医療についてカザフ草原を事例に優れた研究を発表しており［Afanasyeva 2008; 2010; 2013a; 2013b］、ロシアの帝国医療研究を牽引する一人である。報告は、20世紀初頭のカザフ草原におけるペスト（чума）の流行とそれに対抗するロシア帝国の医療措置を、比較史的視点も加えつつ、検証するものだった。

帝国医療の定義について、報告者のアファナシエヴァ氏から特別な説明はなかったが、「宗主国が植民地で確立した医学・衛生学などに関する学知の体系を植民地医学（colonial medicine）と呼び、これらにもとづき、医療・衛生事業が行政化される体制を帝国医療（imperial medicine）と呼ぶ」［歴史学研究会編集委員会 2007:1］という位置づけと、大きな相違はないと考えられる。帝国医療は、19世紀末から20世紀初期に近代医療・衛生事業がグローバルに展開される中で、とくに植民地統治技術の変容と医学・衛生学などに関する学知の体系との関係性を考察することで、近代帝国の姿を逆照射するための分析概念と言えよう。

報告では、アレクサンドル・P・オリデンブルグスキー公（1844-1932）の「ペスト菌予防・闘争措置に関する委員会（Комиссия о мерах предупреждения и борьбы с чумной заразою）」の設置（1897年1月）に至るまでのロシア帝国の近代衛生事業の歴史から始まり、中央政府がカザフ草原でのペスト流行にどのように対処したのかが示された。今日では、当時のペスト流行は、香港発の世界的なパンデミック（「第三のパンデミック」）の一部として知られ、インド方面からカザフ草原西部に流行が拡大したと考えられている。しかし流行当時、中央政府と医学界では、これをパンデミックの一部とみなすべきか、それともエンデミックとみ

なすべきなのかで議論が紛糾したという。カザフ草原のペスト流行をパンデミックの一部として考えたとしても、その感染経路はいったいどこにあるのか。当局の疑惑の目は物品の流通に向けられたり、イスラーム巡礼者の移動性に向けられたりした。感染経路が特定できなければ、どこにどのような検疫網を張り巡らせるべきなのか決定することができず、それは刻一刻と変わる事態とのあいだでジレンマを招いた。

さらに当時ロシア政府によって実行された衛生管理の方法には、イギリス帝国やアメリカの植民地での実践との類似性があったという興味深い指摘もなされた。こうした比較史的視点は、アファナシエヴァ氏がかつてイギリス帝国史を専攻していたことも影響していると推察できる。会場からの質問は、諸帝国の植民地統治技術との比較に集中した。セミナーが開催されたミュンヘンは、科学史や産業史の研究が盛んなことでも知られ、医学史的見地からの専門的な質問も少なくなかった。当時のアメリカ医学・衛生学の潮流との関連性について質問が再三なされたが、浅学の筆者にはよく分からなかったというのが正直なところであった。

アファナシエヴァ氏が吐露しているように、帝国医療には軍事的情報も少なくなく、かつその情報はソ連や現代のカザフスタン／ロシアとの連続性もあるため、ロシア人であっても史料にアクセスしにくい部分がある。ただ、史料的な難しさはあっても、帝国医療の実践現場に微視的にもう少し迫る必要があったと思われる。医療衛生行政の当局者と検疫を受ける人々・予防措置を受ける人々との関係性、医療衛生措置に対する当時の現地社会の反応などの検討がやはり不可欠である。医療措置の決定には首都での机上の議論も少なくなく、現場との齟齬を丹念に追うことが、学知の形成と実践の複雑な関係性を解き明かすことにつながる。すでに述べたように、比較帝国論という巨視的な視点からも帝国医療研究を提示しようとしている点に関して、今回の報告は非常に興味深く、研究のさらなる発展に期待したい。また、医学･衛生学のトランスボーダーな性質を考えれば、インテレクチュアル･ヒストリーと帝国論という点においても、この研究の可能性を感じさせられた。個人的には、カザフ草原での医療衛生実践の経験が、シベリアなど帝国内の他の地域の実践にどのような影響を与えたのかという点に興味がかきたてられた。筆者の研究対象地域（ヴォルガ下流域）でも 19 世紀初頭から、たとえばオーストリア帝国の感染症の流行状況や、シベリアに起こった家畜伝染病の発生などに対して、地方当局は細心の注意を払っていた。防疫体制に関わった医官や軍人の地域を越えた移動を含めて、帝国医療実践の地域間参照関係について考えていく必要があるだろう。

このセミナーを主催するのは、ミュンヘン大学史学芸術学部ロシア・アジア研究講座のアンドレアス・レンナー教授である。ヨーロッパの研究機関では旧来、歴史を含むロシア研究は概して東欧研究の枠組みで論じられてきた。そうしたこれまでの傾向に対して、ロシア・

アジア研究講座がロシア研究をアジア研究との関係で考察しようとしている点は、ヨーロッパのロシア研究、アジア研究にとって新たな可能性を秘めている。レンナー教授の元々の専門は医療史であるが、外国人客員研究員として北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター滞在時（2008年度）に、ロシアとアジアの関係性に強い関心を抱くようになり、新たな講座を立ち上げたそうだ。筆者は今回、ポスドク客員研究員として在外研究の機会をいただき、2017年10月末からミュンヘンに滞在しているが、交通の便の良さからヨーロッパ各国はもちろん、ロシアからも多くの研究者の訪問があり、知的刺激を大いに受ける日々を過ごしている。ちなみに、筆者と机を並べるスイス人の若手研究者は、ソ連社会とアフガニスタン紛争（1978年～1989年）の関係について、主に映像メディアの分析を通して考察している。大学院生の研究テーマも、スターリニズムと中央アジア表象、レフ・グミリョフ、カザンと近代心理学など多彩である。日本の中央アジア研究者にとっても、今後の留学、在外研究、口頭発表を行う候補地として、ミュンヘン大学のロシア・アジア研究講座は重要な拠点のひとつとなるかもしれない。

補遺

参考までに、2017年10月から2018年2月までに開催されたセミナーを、以下に列挙する。報告・質疑応答を含むセミナーの時間はだいたい2時間弱で、その後懇親会が催される。比較的小さな研究グループなので、セミナー報告者とじっくり議論できる点が魅力的である。報告タイトルは、筆者が和訳したものである。

【2017／2018年冬季セメスター】

● 10月24日

アンナ・アファナシエヴァ（国立研究大学高等経済学院、ロシア）

「帝国の検疫所：20世紀初頭カザフ草原における反ペスト・キャンペーン」（英語）

● 11月14日

左近幸村（新潟大学、日本）

「セルゲイ・ヴィッテと汽船協会：ロシア帝国を海域研究の視点から再考する」（英語）

● 11月29日

デイヴィド・シンメルペンニンク＝ファン＝デル＝オイエ（ブロック大学、カナダ）

「パーヴェル1世のインド遠征」（英語）

● 1月 10日

アンドレアス・ヒルガー（モスクワ・ドイツ研究所、ロシア）

「ソ連・インド関係（1941年－1966年）：脱コロニアル時代と冷戦時代の帝国アジェンダと民族アイデンティティ」（ドイツ語、市民公開講座）

● 1月 16日

ヨルン・ハッペル（バーゼル大学、スイス）

「アジアの騎手、ボリシェヴィキの怪物、東方からの恐怖」（ドイツ語）

● 1月 23日

アンドレアス・レンナー（ミュンヘン大学、ドイツ）

「帝国の遺産？ ロシアとユーラシアのあいだ」（ドイツ語、市民公開講座）

● 1月 25日

ミリンダ・バナルジ（ミュンヘン大学、ドイツ）

「グローバル・インテレクチュアル・ヒストリーのレンズを通して東京裁判を再考する：ラダビノード・パールの法哲学とパラドキシカルな異論」（英語）

● 1月 30日

ヤナ・グゼイ（サンクトペテルブルグ理工大学、ロシア）

「ロシア極東の反アジア・イメージと革命ロシアの黄禍論」（英語）

● 2月 7日

フランク・グリュナー（ビーレフェルト大学、ドイツ）

「ミステリーなのか、国民的紋切り型なのか？ 歴史転換におけるロシアの魂と憂鬱のディスコース」（ドイツ語）

参考文献

Afanasyeva, Anna. 2008. “Освободить… от шайтанов и шарлатанов»: дискурсы и практики российской медицины в Казахской степи в XIX веке,” *Ab Imperio* 2008(4), pp. 113-150.

Afanasyeva, Anna. 2010. “Russian Imperial Medicine: the Case of the Kazakh Steppe”, in *Crossing Colonial Historiographies: Histories of Colonial and Indigenous Medicines in Transnational Perspective*, edited by A. Digby, W. Ernst, P.B. Mukharji, Cambridge Scholars Publishing: Newcastle, pp. 57-75.

Afanasyeva, Anna. 2013a. “Kazakh Religious Beliefs in the Writings of Russian Doctors during the Imperial Age (1731-1917),” in *Islam, Society and States across the Qazaq Steppe (18th-Early 20th Centuries)*, edited by N. Pianchola, P. Sartori, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, pp. 143-180.

Afanasyeva, Anna. 2013b. “Quarantines and Copper Amulets: the Struggle against Cholera in the Kazakh Steppe in the Nineteenth Century,” *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 61(4), pp. 489-512.

歴史学研究会編集委員会 2007「特集　東アジアにおける医療・衛生の制度化と植民地近代性」『歴史学研究』834、1頁。

（日本学術振興会特別研究員 PD）

ルーヴェン・カトリック大学所蔵ドゥンガン関連資料群（リムスキー＝コルサコフ・コレクション）の調査

海野　典子

はじめに

筆者は、2017年9月8日、11−14日にかけて、ベルギー王国フラームス＝ブラバント州都ルーヴェン市に位置するルーヴェン・カトリック大学にて、中央アジアのドゥンガン関連資料群、通称「リムスキー＝コルサコフ・コレクション」(1)を閲覧した。

ドゥンガン（トゥンガン、東干などとも。自称は回回 *Huihui*）は、「19世紀後半から20世紀中頃にかけて、中国西北部からロシア領及び旧ソ連領中央アジアに移住した中国系ムスリム（回族）を中心に形成された民族集団」［王 2005］を指す。ドゥンガンについては、近年、言語学や人類学の分野で研究が盛んである(2)。2010年10月には日本の東京外国語大学で、2014年9月にはノルウェーのオスロ大学でドゥンガンに関する国際ワークショップが開催されるなど、国際的な学術交流も進んでいる(3)。しかし、ドゥンガン関連資料のなかには、本稿が取り上げるリムスキー＝コルサコフ・コレクション内のアイテムのように、いまだ研究者間で情報の共有がなされておらず、十分に活用されているとは言い難い資料があることも事実である。また、同コレクションには中央アジアにおけるドゥンガンの歴史を知る上で興味深い文献が含まれているにもかかわらず、歴史学的観点から同コレクションを評価した研究は管見の限りない。そこで、本稿は同コレクションの概要や閲覧方法を紹介し、その史料的価値を示すとともに、中央アジア史におけるドゥンガン研究、及び中国ムスリム研究の位置づけを考える。

---

(1) ルーヴェン・カトリック大学の公式サイトには、Svetlana Rimsky-Korsakoff Dyer Collection と表記されている。本稿では「リムスキー＝コルサコフ・コレクション」と略記する。“Svetlana Rimsky-Korsakoff,” URL: https://www.kuleuven.be/verbiest/sml/svetlana, 閲覧日：2018年2月18日。

(2) ドゥンガン語研究の最新動向については［菅野 2013］に詳しい。人類学の分野では、ソレダ・ヒメネス・トヴァル（Soledad Jiménez Tovar）氏が目覚ましい研究成果を上げている（最新の業績は［Jiménez Tovar 2016］）。

(3) 東京外国語大学で開催された「ドゥンガン人に関する国際集会」の参加記は拙稿［山﨑 2011］を参照されたい。

リムスキー＝コルサコフ・コレクションについて

リムスキー＝コルサコフ・コレクションは、1931年ハルビン生まれのロシア人で、後にアメリカのジョージタウン大学で中国言語学を学び、オーストラリア国立大学で教鞭をとったドゥンガン語の先駆的研究者、スヴェトラーナ･リムスキー＝コルサコフ･ダイアー（Svetlana Rimsky Korsakoff Dyer）氏[4]が、2007年にルーヴェン・カトリック大学フェルビースト研究センター（The Verbiest Institute）附属のスクート記念図書館（Scheut Memorial Library）に寄贈したものである。フェルビーストとは、周知のとおり、フランドル出身のイエズス会宣教師で、清朝第 4 代皇帝である康熙帝（在位 1661－1722）に仕え、天文学・地理学・数学をはじめとする西洋の最先端の科学技術を清朝に紹介しながら布教活動を行った、フェルディナント・フェルビースト（Ferdinand Verbiest: 1623－1688、中国語名は南懐仁）のことである。

ルーヴェン・カトリック大学で学んだ彼の名を冠したフェルビースト研究センターでは、スクート記念図書館所蔵の諸外国語コレクションを閲覧することができる。今回筆者が調査したリムスキー＝コルサコフ・コレクションは、280近くのアイテムからなる（カタログの詳細や資料請求方法は後述）。テーマが重複するものもあるが、アイテムの内容は以下の 3 種類に大別することができよう。

(1) ドゥンガン語関連資料

コレクションの大半、250点ほどを占めるのが、中国言語学の専門家であったリムスキー＝コルサコフが各地で収集した、中国西北方言を土台とするドゥンガン語関連の資料である。具体的には、中央アジアで刊行されたドゥンガン語の教科書・文法書・辞書、詩集や小説[5]のほかに、ロシア語・中国語・英語・日本語・フィンランド語で書かれたドゥンガン語に関する研究書や論文が含まれる。出版年は1920年代から2000年代までと、幅広い。日本の中国言語学者である故・橋本萬太郎氏の著作も複数確認される。

(2) リムスキー＝コルサコフ自身の研究成果

第二に、［Rimsky-Korsakoff Dyer 1991］のように、リムスキー＝コルサコフ自身が中央アジアでのフィールドワーク経験を基に英語で執筆した、ドゥンガンの歴史・言語・文化・社会・風俗習慣に関する研究ノートや論文の類である。(1) のドゥンガン語関連資料のうち、約 20 アイテムがこれに該当する。

---

(4) リムスキー＝コルサコフの詳細な経歴については、本稿脚注 1 のルーヴェン・カトリック大学の公式ウェブサイトを参照。

(5) 最も多いのは、クルグズスタン出身のドゥンガン作家・詩人であるヤスィル・シィヴァザ（Iasyr Dzhumazovich Shivaza: 1906－1988）の作品である。

(3) ドゥンガンの歴史や文化に関する概説書

第三に、ドゥンガンの歴史や文化に関するロシア語・中国語・英語の概説書、約30点である。中国語図書の多くはドゥンガンや現在の中華人民共和国の回族に関する書籍であり、中国国内でも比較的容易に入手可能なものである（たとえば、ドゥンガンの中央アジアへの移住の経緯を論じた［優素福 2004］、回族の民間伝承をまとめた［李 1988］など）。意外にも、ドゥンガン研究の大家である回族研究者の胡振華氏やその弟子である丁宏氏の著作は見当たらなかった。

事前の準備

2017年9月の調査を希望していた筆者は、同年5月下旬にルーヴェン・カトリック大学のウェブサイトに記載されているメールアドレス（pieter.ackerman@kuleuven.be）に訪問予定を伝えるメールを送った。数日後に担当者のピーター・アッカーマン（Pieter Ackerman）氏から返信があったが、夏期休暇を挟んだためか、その後約2ヶ月にわたって連絡がとれなくなってしまった。7月上旬に再びメールを送ったところ、下旬になってコレクションのカタログがエクセルファイルで送られてきた。カタログは現在も整理中らしく、資料の配列順がほとんど統一されていないため、若干見づらい。出版年月日順や出版地別に分類されていればより見やすかったのではないかと思う。今後の改善に期待したい。

アッカーマン氏によると、コレクション利用の一週間前までに、①閲覧を希望する日時、②閲覧を希望する資料のタイトル、の2点を知らせる必要がある。前述のカタログには資料請求番号が記載されていなかったので、筆者の場合はエクセルの蛍光ペン機能を使って閲覧を希望するアイテムにマーカーを引き、アッカーマン氏に送った。一度に閲覧できるアイテムは10までと決められているということだが、申請数は特に制限がないようだったので、約40のアイテムを事前に申請した。また、資料の持ち出しや複写は許可されていないが自由に写真撮影を行ってもよいと言われたので、カメラを持参することにした。

なお、アッカーマン氏をはじめとするフェルビースト研究センター職員とのメールのやり取りや現地での会話は、基本的に英語で行った。同研究センターには台湾や中国大陸出身のスタッフも多く、中国語で話しかけると歓迎された。ベルギーの公用語であるオランダ語やフランス語を流暢に話すことができなくても、文献調査に支障はないだろう。

現地での調査

リムスキー＝コルサコフ・コレクションを利用するためには、同コレクションが所蔵されているスクート記念図書館（住所は Vlamingenstraat 1, 3000, Leuven）ではなく、フェルビースト研究センター内の閲覧室（Naamsestraat 63）に行かなければならないので注意されたい。

フェルビースト研究センターの閲覧室は、美しい西洋建築に囲まれた小さな中庭に面している。静謐な雰囲気が感じられる中庭には、清朝の欽天監副（天文台副長）を務めたフェルビーストが作成したとされる、天球儀のレプリカが設置されている。ルーヴェン・カトリック大学は一種の観光スポットになっているらしく、滞在中は観光客や大学関係者が天球儀の写真を撮っているのを幾度も目撃した。

研究センター到着後は、まず一階の入口ドアを入ってすぐ左側に位置するオフィスで氏名と来館目的を告げる。パスポートなど身分証の提示を求められることすらなくスムーズに入館することができたが、念のため写真付きのIDを持参したほうが良いだろう。筆者が事前に申請していた約40のアイテムは、アッカーマン氏がすでに図書館から取り寄せてくださっていた。コレクションは、オフィスの向かい側にある閲覧室で自由に閲覧・撮影することができる。作業用テーブルは申し分のない広さで、カメラやパソコン充電のための電源も使用可能である。たまにスタッフや学生が荷物を取りに来たりする以外には閲覧室に筆者一人きりであり、黙々と作業を行うことができた。総じて快適な作業環境であったと言える。

ルーヴェン滞在中、筆者は約20のアイテムを追加申請した。筆者がリムスキー＝コルサコフ・コレクションを実際に利用したのは正味5日間であったが、合計60ほどのアイテムを閲覧・撮影するのに十分な時間であったと思う。長期休暇期間や土日祝日を除けば、閲覧室は基本的に平日午前9時から午後5時まで開室しており、ランチタイムに一時的閉室するようなこともなかった。研究センターを出てすぐのナームセ通り（Naamsestraat）にはレストラン・カフェやスーパーがたくさんあり、食事場所には困らない。市庁舎やマーケット広場が近く交通の便が良い上に、周辺には宿泊施設も複数ある。効率よく調査を進めることができるだろう。

史料的価値

前述のとおり、リムスキー＝コルサコフ・コレクションはドゥンガン語関連資料がその大半を占めている。言語学の専門家にとっては、特に多くの発見があるに違いない。同時に、20世紀前半に出版された一部のアイテムは歴史研究の観点から見ても興味深い内容を含んでいる。たとえば、ロシア・ソ連領中央アジアに移住して日の浅い、中国領出身の漢語を話すムスリムが「ドゥンガン」として現地社会に定着していく様子(6)は、移住の経緯をまとめた論文や彼らの口承文芸に関する研究、ソ連の政治指導者や社会主義体制を称賛する詩が収

(6) ドゥンガンのロシア・ソ連領移住には主に三つの大きな波がある［王 2012：347］。第一波は1860年代に陝西・甘粛地域で蜂起し、清朝の鎮圧を受けて1870年代後半にロシア帝国領に亡命した人々。第二波は、1880年代、ロシア軍占領下にあったイリ地方が清朝政府に返還されたときに移住した人々。第三波は、1962年に起きたイリ事件の際に新疆から旧ソ連領中央アジアへ亡命した人々である。

録されたドゥンガン語文学作品の記述などから窺い知ることができる。また、1930年代に相次いで刊行されたドゥンガン語の正書法や文法に関する書籍、及びドゥンガン語・ロシア語辞典は、ドゥンガンの言語状況の変化、ソ連の研究者の彼らに対する関心の高さを伝えてくれる。

ただし、これらの文献を史料として扱う際には注意を要する。なぜならば、印刷が鮮明ではなく書誌情報が不明瞭なもの、リムスキー＝コルサコフが複写し製本した際に落丁が生じたと思われるものも少なくないからだ。しかし、彼女が収集したこれらのアイテムが、ドゥンガンの歴史を知るための貴重な文献資料であることには変わりない。また、至る所に残されたメモ書きからは、リムスキー＝コルサコフがドゥンガンの歴史・言語・社会・文化・風俗習慣に深い関心を寄せていたことが改めて確認される。さらに、上記文献のなかには、クルグズスタン出身のドゥンガン人歴史学者であるムハメド・スシャンロ（Mukhammed Iasyzovich Sushanlo）をはじめとする世界各地の研究者が、リムスキー＝コルサコフにこれらの資料を寄贈したときに書いたと思しき署名が見られる。これらの署名は、リムスキー＝コルサコフの学術ネットワークの広さを物語っていると言えよう。

テュルク系ムスリムやロシア系住民に比べて人口が圧倒的に少なく、中央アジア社会での政治的・文化的影響力が限定されているドゥンガンの歴史は、これまで十分に研究されてきたとは言い難い。しかし、中国領出身のムスリムというマイノリティの視点からロシア・ソ連統治下の中央アジアの社会状況や民族政策を再検討することは、中央アジア近現代史を多角的に論じる上で大きな意味を持つはずである(7)。また、ユーラシア大陸を横断する現代版シルクロード経済・外交圏の構築を目指す「一帯一路」構想が中国によって提唱され、推し進められている今日の世界にあって、長い間中国との経済・文化交流を続けてきた中央アジアのドゥンガンが果たすだろう役割は無視することができない。今回筆者が調査したリムスキー＝コルサコフ・コレクションは、こうしたドゥンガンの歴史や文化を知る上での重要な手がかりであり、豊富なアイテム数や出版地・言語・ジャンルの多様性を誇るユニークな資料群である。中国の中央民族大学の東干学研究所やクルグズ共和国民族科学アカデミーのドゥンガン学・中国学研究センターに所蔵されている資料などと併せて、今後多くの研究者が同コレクションを利用し、中央アジア研究や中国ムスリム研究を進展させていくことが期待される。

---

(7) ドゥンガンとほぼ同時期に中国領中央アジア（東トルキスタン、新疆）からロシア・ソ連領中央アジアに移住したテュルク系ムスリムの歴史やドゥンガンとの関係については、「ウイグル」ネーションの成立過程を明らかにした［Brophy 2016］に詳しい。

最後に

調査に際して、ルーヴェン・カトリック大学フェルビースト研究センターのスタッフであるピーター・アッカーマン氏やシェリル・リャオ（Cheryl Liao）氏、及びスクート記念図書館スタッフの方々には大変お世話になった。また、本調査は、文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（C）「19～20世紀中央ユーラシアにおける越境と新疆ムスリム社会の文化変容に関する研究」（研究代表者：新免康氏）の助成を受けて実施することができた。各関係者にこの場を借りて厚くお礼申し上げる。

参考文献一覧

Brophy, David. 2016. *Uyghur Nation: Reform and Revolution on the Russia-China Frontier*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

Jiménez Tovar, Soledad. 2016. “Limits of Diaspority in Central Asia: Contextualizing Dungan’s Multiple Belongings,” *Central Asian Survey* 35(3), pp. 387-404.

菅野裕臣 2013「最近のドゥンガン研究の概況――特にソ連崩壊後の言語学研究について」『日本中央アジア学会報』9、57-66頁。

李樹洪 1988『回族民間故事集』銀川：寧夏人民出版社。

王建新 2005「ドゥンガン」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社、381頁。

――― 2012「中央アジアのドゥンガン」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』東京：明石書店、347 － 351頁。

Rimsky-Korsakoff Dyer, Svetlana. 1991. *Soviet Dungans in 1985: Birthdays, Weddings, Funerals and Kolkhoz Life*, Taipei: Centre for Chinese Studies.

山﨑典子 2011「「ドゥンガン人に関する国際集会」に参加して」『日本中央アジア学会報』7、65-70頁。

優素福 2004『悲越天山　東干人紀事』銀川：寧夏人民出版社。

（日本学術振興会特別研究員ＰＤ）

サマルカンドのイスラム・カリモフ廟を訪れて

帯谷　知可

2016年9月ウズベキスタン大統領イスラム・カリモフ（1938－2016）が逝去した後、ウズベキスタンでは初代大統領カリモフの功績を称え、その「記憶の永久化（xotirani abadiylashtirish / увековечение памяти）」（以下、必要に応じてウズベク語／ロシア語の順で原綴を示す）のための一連のプロジェクトが国家主導で進められてきた［帯谷 2017; 2018］。カリモフの名を冠した基金・博物館・モスクの開設、各地での銅像の設置などとならんで、故郷サマルカンドのカリモフの眠る墓所を「墓廟」化することもそこには含まれており、2017年に入った頃から急ピッチで諸事業が進められていた。

そのイスラム・カリモフ廟は2018年、カリモフの誕生日にあたる1月30日に完成・公開された。筆者は2018年夏、完成後のカリモフ廟を訪れる機会を得たので、ここにその様子を紹介しよう。

ハズラティ・ヒズル・モスクとその周辺

カリモフの墓所はハズラティ・ヒズル・モスクにある。このモスクは、従来あまり修復の手も入っていない、古色美しい比較的こぢんまりしたもので、サマルカンドを訪れた観光客が必ず立ち寄るであろうレギスタン広場からタシュケント通りへ出て、左手にビビ・ハニム・モスク、次いでスィアブ・バザールを見ながら進んでいったなら、その先の丘のきわに控えめな姿を見せていた。バザールから直線距離は近いのだが、行く手は交通量の多い道路によって半ば遮断されており、横断歩道も近くにはなく、ハズラティ・ヒズル・モスクまであえて行く者は稀だっただろう。それは歴史的建造物ではあるが観光資源というよりは地元の人たちのモスクであり、その裏手には墓地が広がっていた。サマルカンドで聞いた話によれば、その墓地にはカリモフの両親も眠っているのだという。

レギスタン広場でムスリム宗務局長が取り仕切る厳粛な葬送儀礼（ジャノザ）が行われた後、カリモフの亡骸はただちにこのモスクの敷地内に準備された場所に埋葬された。その場所を確保するために、元々あった墓などが幾分か整理されたそうである。筆者は2017年1

写真１　2017 年 1 月段階のカリモフの墓

月にもここを訪れたが［帯谷 2017: 48–50］、その時の墓所は、盛り土が白いバラで覆われ、上部に簡易な屋根がかけられているのみで、初代大統領のものとしては質素と表現してもよいような、控えめなしつらえだったのが印象的だった（写真 1）。

カリモフの墓所の墓廟化は、まさにカリモフの眠るこの盛り土の上に建造物を構築するだけでなく、ハズラティ・ヒズル・モスク全体とその周辺の大規模な改修、再開発といってもよいほどの大工事を伴うことになった。モスクの正面からも裏手からも墓所にアクセスできるよう、敷地全体が整備され、参詣者用の付属施設なども造られた。

実は、カリモフ逝去の 10年ほども前から、タシュケント通り周辺では様々な形で地区改造が始まっていた。その最たる出来事は、タシュケント通り東側に位置していた国立サマルカンド博物館の撤去（と移転）だろう（これについてはサマルカンドだけでなく首都タシュケントの関連分野の研究者や博物館・美術館関係者が一様に遺憾の念を吐露するところである）。かつての博物館とその周辺部のかなり広大なスペースは、タシュケント通りと一体化した市民や観光客の散策の場として整えられた。植樹が行われ、噴水や街灯などが設置された。そしてなぜか新たに 2頭の黄金のトラのモニュメントが設置された。こうした事態について地元では、カリモフが年齢を重ねるにつれ、その逝去後にそなえているのではないか、博物館のあったレギスタン広場の隣接地区に墓所が予定されているのではないか、というような噂がささやかれていたそうだ。しかし、カリモフの記憶の「永久化」にあたっては、先の黄金のトラと噴水が撤去され（黄金のトラは別の場所に移設）、そこにはカリモフの銅像が出現したのだった。

カリモフ廟建設が決まったことによって、この地区改造がそれまで整備の及んでいなかっ

たハズラティ・ヒズル・モスクのある丘の側にも及ぶことになったと見ることもできるだろう。スィアブ・バザール側からタシュケント通りをまっすぐ進めばそのままカリモフ廟にたどり着けるよう、高架橋が建設されることとなった。現地の案内板には「ウズベキスタン共和国初代大統領 I. A. カリモフ記念複合施設（O‘zbekiston Respublikasi Birinchi Prezidenti I. A. Karimovning yodgorlik majmuasi / Мемориальный комплекс Первого Президента Республики Узбекистан И. А. Каримова）と記載されており、ハズラティ・ヒズル・モスクの名称も公には使われなくなるのかもしれない。

レギスタン広場からタシュケント通りへ

カリモフ廟の完成によって、この地区の様変わりもひと段落したかのようである。レギスタン広場からカリモフ廟へと歩いてみれば、そこはゆっくりしたペースで30分ほどのひとつながりのルートとなり、道も舗装されていて、実に快適に散策ができる。

筆者が訪問した折、レギスタン広場には数組の華やかな婚礼衣装のカップルの姿が見えた。近年のウズベキスタンでは結婚の記念に美しく演出された画像を残すこと（その撮影は「フォト･セッション」と呼ばれる）が流行しており、レギスタン広場は格好の撮影場所になっているようだ。撮影が終わると、カップルはレギスタン広場を正面に見て右方向へ移動していく。その後を追うように進むと、タシュケント通りに接続する小道が整備されている。その小道がまっすぐ伸びる先に視線を向ければ、カリモフ像が目に入る。カップルはその像に花束を捧げに行く。

タシュケント通りは歩行者天国になっているが、観光客向けの電気自動車がスィアブ・バザールの前あたりまで往復している。夏の暑い盛りのこと、日が落ちる頃になると地元の人たちも三々五々散歩に出てきて賑やかになる。昨年から登場したという貸自転車屋が中国製の自転車を並べ、地元の子供たちが嬉々として自転車を乗り回していた。

タシュケント通りはかつてのシルクロードだとも伝えられる通りであり、観光客にとっても目貫通りだが、有名なモスクや墓廟などの歴史的建築物、みやげ物店、カフェ、ホテルなどとならんで、あえて注意を向けるなら、そこには今、カリモフ像、カリモフの学んだ学校、そしてその先にカリモフ廟と、結果としてカリモフゆかりの場所が集中している。

スィアブ・バザール側からハズラティ・ヒズル・モスクへ向かうのを阻んでいる道路の上には、両端に門扉のついた高架橋が開通した。自転車で、あるいは犬を連れてここをわたるのは禁止という表示がある。この橋の前で、カリモフ廟をバックに記念撮影をする人も多い。

うかつにも歩き始めてからだいぶ後になって、タシュケント通りの名称自体が「イスラム･カリモフ通り」に変更されており、それは高架橋を経て、カリモフ廟入口前の道へとつながっているのに気が付いたのだった。

写真２　完成したカリモフ廟
〈写真１とほぼ同じ位置から撮ったもの〉

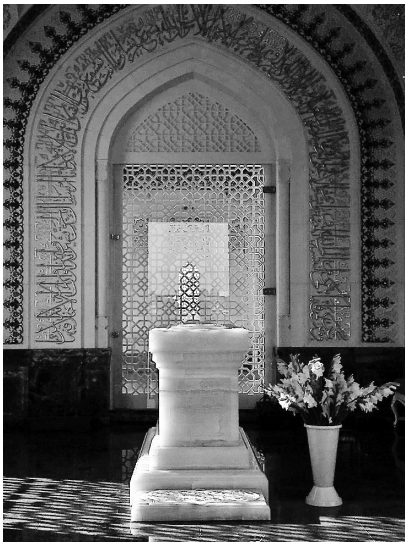

写真３　カリモフ廟の内部

イスラム・カリモフ廟

橋をわたると、タシュケント通りあらためイスラム・カリモフ通りの左手上にモスクのアイヴァン、それに隣接する本来のモスク正面入口、ミナレットなどを見ながらカリモフ廟へ上る階段があるのだが、参詣者はまずは通り右手に設けられた清めの場所に立ち寄る。人々がぐるりと囲めるよう、泉を模したかのように水場が円形に造られており、いくつか水道栓が設置され、茶碗が置かれている。（ただし、胸ほどの高さに造られているので、ここで足まで清めることはできない。）ドレス・コードの表示が目を引いた。男性はショートパンツ禁止、女性はノースリーブとミニスカート禁止・スカーフ着用のこと、と指示している。この水場の奥には小さな建物があり、より本格的な清めを行いたい人はそちらへ入るのかもしれないが、確認はできなかった。

いよいよカリモフ廟へと階段を上ると、「これは、ウズベキスタン共和国初代大統領、偉大なる国家人・政治家にして、敬うべき誉れあるウズベク民族の息子、イスラム・カリモフが眠る聖なる永遠の場所である」とウズベク語と英語で記された御影石が置かれている。その後ろ側、かつて盛り土のあった場所に、ドーム屋根を冠し、四方の外壁を幾何学模様とカリグラフィーで彩った、あまり大きくはないが派手さを抑えた美しい廟が完成していた。正面の木彫扉が開かれており、ほの暗い廟の中に真っ白な墓石が浮かび上がるように見えた（写真 2、3）。

廟の背後には、回廊風に木彫の柱が支える屋根のかかったスペースがコの字型に造られ、参詣者用のベンチが置かれている。その一部はガラス張りでソファの置かれたVIP室になっ

写真４　カリモフ廟とその周囲

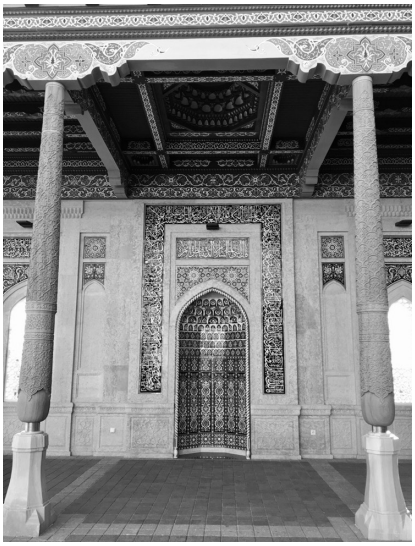

写真５　壁面のミフラーブ

ている。この回廊風の壁面にはミフラーブと思しき窪みも設けられている（写真 4、5）。壁面は幾何学模様とカリグラフィーで埋め尽くされているが、カリグラフィーにはアラビア文字のほか、現代ウズベク語と英語が含まれている。これらの言葉は何に由来するのだろうと少々気になる。コの字の空いた部分には、屋根はないがやはり参詣者用の椅子が並べられている。

廟を見た後、参詣者はこのベンチや椅子に腰を下ろし、しばしイマームの祈祷に耳を傾ける。イマームは 1 名がここに常駐しているらしく、筆者の訪問時にはグレーの長衣に黒っぽいドッピ（ウズベク帽）を着けたイマームが、集まってくる人々の数を見ながら、数分おきに祈りの言葉をマイクに乗せて発していた。参詣者は両手を胸の前に捧げて祈祷を聞き、最後に両手で顔をなで、立ち上がり、出口へ向かう。カリモフの葬儀以降、筆者はカリモフの生涯は最後にウズベキスタンにとっての「よきイスラーム」の衣で覆われたのだという印象を抱いたが［帯谷 2017: 51−52］、おそらくは伝統的な聖者廟の様式を模して造られたであろうこの墓廟を見て、ますますその思いを強くしたのである。

回廊風のスペースの外へ出ると、下へ降りる階段につながっている。その階段上に立った時、カリモフ廟がなぜここに造られることになったのか、わかったような気がした。そこからは、連綿と続く山々を背景に、ビビ・ハニム・モスクなどの壮麗な建築物を含む美しきサマルカンドを見はるかすことができるのだ。街の喧騒は遠く、静かな絶景が眼下に広がる（写真 6）。その風景は訪れた者にどこか清々しく、ありがたいような気持ちをいやおうなく呼び起こすように思われた。

写真6　ビビ・ハニム・モスク方面を望む

雑感

もちろん筆者の訪問時に限った観察ではあるが、カリモフ廟を訪れる人たちは、実に様々であった。外国人観光客よりはウズベキスタンの人々のほうが圧倒的に多かった。その中には、とても厳粛な面持ちで参詣している人もおり、女性の中にはきちんと頭をスカーフで覆って、廟の敷地に入ってくる人も見られた。一方で、完全に物見遊山気分で、廟を背景にセルフィーを撮ることにひたすら熱心な人も多かった。アイスクリームを食べながら参詣している家族連れもいた。警察官が 1 名、入口付近で警備にあたっていたが、最近の外国人観光客優先政策もあってか、監視の目を光らせたり、参詣者に何か注意するような様子はまったくなく、撮影禁止の表示はあるものの、それは完全に名目的になっていた。ほぼすべての参詣者が携帯電話やカメラで写真を撮っているが、誰もそれをとがめはしない。筆者もはばかることなく写真を撮ることができた。先に述べたように、ドレス・コードの表示はあったが、それも強制されることはなく、ショート・パンツの男性やノースリーブの女性が注意を受けることもなく、女性用のスカーフの貸し出しなども行われていなかった。一言でいえば、参詣は、予想に反するほどに、かなり自由であった。

参詣者には、故人となった初代大統領への崇敬の念、聖者廟参詣の作法を守る敬虔さ、美しく整備された新しい名所を一度は見てみたいという好奇心、そうしたものが交錯しているような印象を受けた。滞在中にたまたまサマルカンド観光に来ていた親族のグループと知り合いになったが、フェルガナ地方在住だという最年長の女性がカリモフ廟への参詣にこだわっていたのに対し、今はロシアで暮らすという他の家族は、「時間がないし、聖者廟へ行

きたいならシャーヒ・ズィンダへ行ったらいいでしょう、そのほうがご利益がありますよ」などと彼女を説得していたのが印象に残った。トルクメニスタンの初代大統領サパルムラト・ニヤゾフの墓廟は公開後数年たつと訪れる人もまばらになったと聞くが、果たしてカリモフ廟が新しい「聖地」あるいは「聖者廟」として定着するのかどうか、それはこれからまだ見守るべきことだろう。かつてのハズラティ・ヒズル・モスクのひなびた古色は一掃されてしまった感は否めないが（この点では、ウズベキスタンで近年問題にもなっている、文化財保護と観光資源整備と都市の再開発がうまくかみ合わない事態がここでも生じているらしいことは大いに気になる）、その一方で、おそらくは現代ウズベキスタン工芸の粋を尽くし、清潔なトイレや、階段の上り下りが困難な人用にガラス張りのエレベーターも設置するなど、近代的な設備を整えた新しい名所がサマルカンドに誕生したこと、今後ここにより多くの人が訪れるようになることは疑いないように思われた。そこに人々がどのような思いを持ってやってくるのかはまた別の次元の（しかし興味深い）問題だ。少々うがった見方をすれば、カリモフ廟の建設と未着手の地区改造が表裏一体で進められたのかもしれない。

カリモフの「記憶の永久化」についていえば、関連する施設の建設としてはサマルカンドにカリモフ博物館の設置が決定されていたはずだが、これについてはサマルカンドでも特に具体的な情報は得られなかった。また、カリモフの生涯を描いた映画製作や文芸作品についても進捗は伝えられていないようである。

最後に、若干蛇足ながら、シャフカト・ミルズィヨエフ新大統領の推進する観光振興策等によってウズベキスタン滞在が格段に便利になってきていると実感したことも付け加えておきたい。2018年2月から日本も対象国となって導入されたヴィザなし渡航については、1カ月以内の滞在であれば、出発前にも空港到着後も何の手続きも支払いも必要ない。到着後はパスポート・コントロールに直行し、パスポートを提示するのみである。居住登録（いわゆるレギストラーツィヤ）は相変わらず必要だが、オンライン登録が導入された。以前はホテルによりばらばらな形式の紙片をもらったが、オンライン登録結果がプリントアウトされた統一形式のものとなった。チェックイン、チェックアウトの時刻まで記載されるので、チェックアウト時にそれを受け取ることになる（紙片であることは変わりない）。複数のホテルに宿泊する場合は、二番目以降のホテルでは直前のホテルでもらった紙片の提示を求められる。また、観光客を支援する目的で設置されたという旅行者警察（Tourist Police）詰所の主な観光施設への設置、QRコードによる観光施設情報の提供などは、新しい試みとして目を引いた。警察官等に対するモラル教育も強化されていると聞く。WiFiのある小規模で快適なホテル、あるいはリーズナブルなカフェやレストランの増加・多様化・近代化も著しく進展しているように感じられ、調査目的の滞在にも益するところは大きいだろう。

参考文献

帯谷知可 2017「ウズベキスタン共和国故カリモフ初代大統領の『記憶』と『記念』：ポスト・カリモフ時代の胎動」『ユーラシア研究』56、48－53 頁。

帯谷知可 2018「建国とナショナリズムの神話：故イスラム・カリモフ初代大統領をめぐる『記憶の永久化』」帯谷知可編『ウズベキスタンを知るための 60 章』東京：明石書店、290－293頁。

（京都大学）

中央アジア関連研究文献リスト 2017

本リストは、2017年（1月～12月）に刊行された、原則としてイスラーム化以降の中国新疆、旧ソ連領のムスリム地域およびその周辺地域に関する学術文献をリストアップしたものである（理科系のものを除く）。原則的に、国内で刊行された、国内で活動する研究者による著作を中心とし、エッセイや辞典項目等は除外した。ただし、本学会会員の著作については、海外刊行のものも一部含まれる。なお、各文献の副題はコロンつなぎで統一した。

書籍

■宇山智彦責任編集『越境する革命と民族（ロシア革命とソ連の世紀５）』岩波書店（3,700円+税）

- 宇山智彦「総説　ユーラシア多民族帝国としてのロシア・ソ連」
- 同「ロシア・ムスリムの革命と「反革命」:「想像の帝国」との協力と闘い」
- 半谷史郎「ソ連の民族政策の多面性：「民族自決」から強制移住まで」
- 吉村貴之「カフカスの革命：国際政治に翻弄された民族自決」
- 長縄宣博「反帝国主義の帝国：イスラーム世界に連なるソヴィエト・ロシア」
- 地田徹朗「ブレジネフ期連邦構成共和国の政治と民族の問題：クルグズスタンを事例として」
- 青木雅浩「ルスクロフ：中央アジアとモンゴルを股にかけた革命家」

などを所収

■帯谷知可編著『社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族１』京都大学東南アジア地域研究研究所（非売品）

- 帯谷知可「20世紀初頭の帝政ロシアにおけるムスリム女性をめぐる議論についての覚書：N. オストロウーモフ「ムスリム女性の権利の状況（カザン、1911年）から」」
- 宗野ふもと「シャフリサブズ「フジュム」芸術製品工場について：ソ連期ウズベキスタンにおける手工業の集団化と女性の労働」
- 和崎聖日「マフルの是非をめぐる知識人のまなざし：1950－1970年代ソ連中央アジア南

部地域における反イスラーム宣伝と現代」

- KARIMOVA Shakhzoda and AZIMOVA Nodira, “Modern Uzbek Family and Marital Relations: A Case Study on Mindon Village, Ferghana Province”

などを所収

■外務省欧州局中央アジア・コーカサス室『中央アジア・コーカサスと日本：四半世紀を経て深化する 8 カ国とのパートナーシップ』外務省国内広報室（非売品）

■櫻間瑛、中村瑞希、菱山湧人『タタールスタンファンブック：ロシア最大のテュルク系ムスリム少数民族とその民族共和国（連邦制マニアックス Vol.1）』パブリブ（2,200 円＋税）

■塩野崎信也『〈アゼルバイジャン人〉の創出：民族意識の形成とその基層』京都大学学術出版会（5,000 円＋税）

■鈴木隆・西野真由編『現代アジア学入門：多様性と共生のアジア理解に向けて』葦書房（1,800 円＋税）

- 田中周「中央アジアからみた中国と日本」

などを所収

■中央大学政策文化総合研究所「日本とユーラシア社会：海洋と大陸の歴史・文化」プロジェクト編集・発行『日本とユーラシア社会：調査の現場から』（非売品）

- 堀直「1983－2007 年の新疆事情調査：私的回顧と全体展望」
- 真田安・新免康「新疆におけるバザール・マザール調査（1996 年）をめぐって」
- 森川哲雄「九州地区における新疆現地調査（人文系）の概要」
- 渡邊三津子「地理学分野における新疆調査の状況」
- 梅村坦「日本の人文系分野における新疆現地調査研究（1970 年代～）の回顧について（附１：小島康誉氏の訪問実績、附２：華立氏「清代回民の新疆移住史をめぐる現地調査について」）」
- 鷲尾惟子「音楽事情を中心とした新疆調査の概要：報告レジュメから」

などを所収

■長縄宣博『イスラームのロシア：帝国・宗教・公共圏、1905～1917』名古屋大学出版会（6,800 円＋税）

■日本口承文芸学会編『こえのことばの現在』三弥井書店（2,800 円＋税）

- 坂井弘紀「叙事詩と語り手：中央ユーラシアを例に」

などを所収

■フィンドリー・カーター・V（小松久男監訳, 佐々木紳訳）『テュルクの歴史：古代から近現代まで』明石書店（5,500 円＋税）

■ベックウィズ・クリストファー（斎藤純男訳）『ユーラシア帝国の興亡：世界史四〇〇〇年

の震源地』筑摩書房（4,200円＋税）

■村上勇介、帯谷知可編『秩序の砂塵化を超えて：環太平洋パラダイムの可能性』京都大学学術出版会（3,500円＋税）

- 宇山智彦「権威主義の進化、民主主義の危機：世界秩序を揺るがす政治的価値観の変容」
- 帯谷知可「イスラーム観の違いを克服する：ポスト社会主義、イスラーム復興、権威主義の交錯するウズベキスタンの課題」

などを所収

■山内昌之『中東とISの地政学：イスラーム、アメリカ、ロシアから読む21世紀』朝日新聞出版（1,900円＋税）

■歴史学研究会編『第4次現代歴史学の成果と課題（第2巻：世界史像の再構成）』績文堂出版（3,200円＋税）

- 野田仁「中央ユーラシア史研究の展開」

などを所収

■ DADABAEV Timur and KOMATSU Hisao eds., *Kazakhstan, Kyrgyzstan, and Uzbekistan: Life and Politics during the Soviet Era*, New York: Palgrave Macmillan

- KOMATSU Hisao, “Collective Memory, Oral History and Central Eurasian Studies in Japan”

などを所収

■ ESENBEL Selçuk ed., *Japan on the Silk Road: Encounters and Perspectives of Politics and Culture in Eurasia*, Leiden-Boston: Brill

- KOMATSU Hisao, “Abdurreshid Ibrahim and Japanese Approaches to Central Asia”

などを所収

■ Международное научное совещание «Переосмысление восстания 1916 года в Центральной Азии»: сборник статей. Бишкек: Нео Принт

- Уяма Томохико. Почему крупное восстание произошло только в Центральной Азии? Административно-институциональные предпосылки восстания 1916 года

などを所収

■ «Орталық Азиядағы жапонтану: бүгіні мен болашақтағы даму бағыттары» атты халықаралық ғылыми-тәжірибелік конференция материалдары.（中央アジア諸国日本研究カンファレンス論文集）Алматы: әл-Фараби ат. ҚазҰУ

- Уяма Томохико. Японско-центральноазиатские отношения в глобальном контексте
- 芹川京次竜「年末商戦におけるカザフスタンの商人たちの実践：ニコーリスキーバザールの事例」

などを所収

論文

- 石井智美、塚口朋美「カザフスタン共和国西部地方での食生活調査」『北海道民族学』13, 51-57 頁
- 井上岳彦「遊牧指導者の変容する権力：一七世紀初め～二〇世紀初めにおけるカルムィク草原社会」『ロシア史研究』100, 145-165 頁
- 鵜島三壽「新疆ウイグル自治区における雑技系芸能の分布と特色」『関西外国語大学研究論集』105, 155-170 頁
- ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤ・マルガリータ「中央アジア仏教文化研究者としてのオルデンブルグ」『東洋学術研究』56: 2, 122-139 頁
- ウトメバエワ・カリマン「知られざるユーラシア（No.28）ソ連崩壊前後のクルグズ共和国とカザフスタンにおけるアイトゥシュ／アイトゥスの復興」『ユーラシア研究』56, 65-68頁
- 小野亮介「戦中期における在日・在満タタール人の国際移動：アズハル留学とトルコ転籍問題をめぐって」『地域文化研究』18, 227-248 頁
- 川口琢司「ティムール朝と中央アジア史」『歴史と地理：世界史の研究（251）』704, 35-38頁
- 河野敦史「ワリー・ハーンの侵入事件（1857年）とヤルカンド」『中央大学大学院研究年報：文学研究科篇』46, 47-61頁
- 川本正知「チャガタイ・ウルスとカラナウス＝ニグダリヤーン：『歴史集成』「チャガタイ・ハン紀」の再検討」『西南アジア研究』86, 79-111 頁
- カランダロフ・トヒル（宇山智彦編訳・序文・注釈）「パミールのイスマーイール派：認知されざる諸民族、宗教共同体としての将来」『日本中央アジア学会報』13, 25-37 頁
- 熊倉潤「新疆ウイグル自治区におけるガバナンスの行方」『問題と研究：アジア太平洋研究専門誌』46 (2), 117-148 頁
- 小林善文「新疆ウイグル自治区南部の水環境」『神戸女子大学文学部紀要』50, 61-72 頁
- 小松久男「近現代中央アジアにおけるイスラームの展開」2016年度科研成果報告書『近現代中央アジアにおけるイスラームの展開』東京外国語大学海外事情研究所、3-14 頁
- 坂井弘紀「カザフ草原の「タンバル（タムガル）の岩絵」」『和光大学表現学部紀要』17, 49-62 頁
- 坂井弘紀「テュルクの英雄叙事詩：中央アジアの語り手を中心に」『説話・伝承学』25, 70-89 頁
- 坂井弘紀「中央ユーラシアのテュルク叙事詩の英雄像」『口承文芸研究』40, 198-209 頁
- 櫻間瑛「東方宣教活動の現在：沿ヴォルガ地域における正教会の活動と民族文化」『ロシア史研究』100, 66-93 頁
- 澤田稔「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語注釈（6）」『富山大学人文学部紀要』66,

55-82頁
- 澤田稔「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語注釈（7）」『富山大学人文学部紀要』67, 31-60頁
- 塩谷哲史「伊犂通商条約（1851年）の締結過程から見たロシア帝国の対清外交」『内陸アジア史研究』32, 23-46頁
- 塩谷哲史「中央アジア乾燥地域の都市と水資源：ヒヴァ」『歴史と地理：地理の研究』196（通巻703号）66-73頁
- シャチクチ・メルシャト「ウイグル族都市社会における「チャイ（chay）」の意味：第三の場所と社会関係資本の視点から」『お茶の水地理』56, 11-18頁
- 新免康「中国新疆におけるテュルク語歴史叙述とヤークーブ・ベグ」『中央大学文学部紀要』266, 41-65頁
- 菅原純「ウイグル人のマザール：現代「シルク・ロード」における聖地と信仰」『日中韓周縁地域の宗教文化』3, 27-62頁
- 趙衛国「中国「内地新疆高中班」の少数民族生徒の学校適応と文化的アイデンティティ形成に関する位置考察：山東省Y市A高校での聞き取り調査を中心に」『大東文化大学人文科学研究所人文科学』22, 17-28頁
- 長沼秀幸「19世紀初頭カザフのハンに対するロシア帝国の政策：中ジュズにおけるハン並立制の分析を中心に」『日本中央アジア学会報』13, 1-24頁
- 長沼秀幸「カザフ草原西部におけるロシア帝国の統治の協力者（一七八四－一八二四年）」『ロシア史研究』100, 166-190頁
- ナムジャウ「新疆オイラド・モンゴル社会における活仏信仰の位置づけ：シャリワン・ゲゲンの仏教寺院の事例から」『総研大文化科学研究』13, 195-209頁
- 西原明史「視点としての新疆文学：ウイグル族の民族的自己成型理解のために」『安田女子大學紀要』45, 33-43頁
- 西脇隆夫「キルギス族の昔話について」『比較民俗学会報』38 (2), 1-7頁
- 半谷史郎「朝鮮人の強制移住：ロシア極東から中央アジアへ」『歴史評論』802, 18-30頁
- 廣瀬陽子「中露の狭間で揺れる中央アジア経済政策」『世界経済評論』61 (1), 35-43頁
- 藤本透子「カザフの子育て：ゆりかごの向こうに広がる世界（特集：展示に探る民族の世界観・死生観）」『季刊民族学』162, 67-74頁
- ポポワ・イリーナ・F「一九世紀から二〇世紀初頭におけるロシアの中央アジア探検隊」『東洋学術研究』56 (1), 142-171頁
- 堀江正人「カザフスタン経済の現状と今後の展望」『国際金融』1302, 24-30頁
- 堀川徹「中央アジアのイスラーム」『歴史と地理：地理の研究』196（通巻703号）46-53頁

- 和田春樹、塩川伸明、宇山智彦、池田嘉郎、長縄宣博、松里公孝「ロシア革命百周年記念討論会」『ロシア史研究』99, 26-61 頁
- KIKUTA Haruka “Venerating the Pir: Patron Saints of Muslim Ceramists in Uzbekistan” *Central Asian Survey*. 36 (2), 195-211
- MATSUI Kayo, AKHAPOV Yerlan, KUSSAINOVA Maira and FUNAKAWA Shinya, “Management of Wood Resources: A Dilemma between Conservation and Livelihoods in a Rural District in the Aral Region” *Energy for Sustainable Development*. 41, pp.121-127
- USMONOV Farrukh and INAGAKI Fumiaki “Japan and Water Resources of Tajikistan: Contribution, Challenges, and Realities” *Central Asia and Caucasus: Journal of Social and Political Studies*. 18 (3), pp.70-77
- WANG Ke “Between the ‘Ummah’ and ‘China’: The Qing Dynasty’s Rule over Xinjang Uyghur Society” 『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究紀要』48, 183-219 頁

『日本中央アジア学会報』投稿規定

1. 投稿者は、原則として日本中央アジア学会の会員に限ります。
2. 原稿は、過去に他の学術誌･書籍等に掲載されたことのないもの、投稿時点で他の学術誌･書籍等に投稿中・寄稿中でないものに限ります。
3. 原稿の使用言語は原則として日本語とします。
4. 投稿に際しては、完成原稿を MS-Word 形式で作成し、電子メール添付にて送付してください。手書き原稿は受け取りません。
5. 原稿の送付先は下記の通りです。

   E-mail: jacaseditor@gmail.com

   日本中央アジア学会編集委員会
6. 原稿の種別は、「論説」、「研究ノート」、「書評」、「中央アジア研究動向」、「中央アジア現地事情」、「年次大会発表要旨」からなります。投稿者は、掲載を希望する種別を明記のうえで投稿してください。ただし、掲載される際の種別に関する最終的な判断は、本学会編集委員会が行います。
7. 原稿の分量は、種別ごとに、1枚400字換算にてそれぞれ、「論説」と「研究ノート」: 60枚以内、「書評」: 20枚以内、「中央アジア研究動向」と「中央アジア現地事情」: 15枚以内、「年次大会発表要旨」: 5枚以内、とします。なお、上記の枚数には、本文のほかに、表題、注、参考文献、図表等も含まれます。
8. 原稿の書式については、執筆要領を参照してください。
9. 原稿の締め切りは、「論説」、「研究ノート」、「書評」について1月10日とし、「年次大会発表要旨」については4月20日とします。他の原稿については2月28日とします。
10. 投稿された原稿の採否は、編集委員会において決定します。「論説」、「研究ノート」、「書評」の原稿については、審査を行なった上で、編集委員会が最終的な採否の決定を行ないます。掲載が決定された場合でも、編集委員会より手直しを求めることがあります。
11. 投稿された原稿は返却しません。
12. 校正は、初校についてのみ著者校正をお願いします。その際、大幅な修正や加筆はご遠慮ください。再校以降の校正は、編集委員会の責任で行ないます。
13. 本誌に発表したものを転載する場合は、予め編集委員会に通知した上で、『日本中央アジア学会報』に掲載されたものである旨を記載してください。また、転載された出版物の

発行後、速やかに本学会事務局宛てに 1 部寄贈をお願いします。なお、刊行後の 1 年間は、ウェブページを含め、転載をご遠慮願います。

14. 編集委員会は、本誌に掲載されたすべての原稿について、電子化された媒体により複製・公開し、公衆に送信することができるものとします。

（2017 年 6 月 21 日改訂、2017 年 12 月 1 日メールアドレス変更）

『日本中央アジア学会報』執筆要領

1．原稿の形式・体裁

(1) 表紙に、原稿の種別（「論説」、「研究ノート」など）、表題、英文タイトル、要旨（800字以内）、執筆者名、所属・職位等、および連絡先（郵便番号、住所、電話番号、メール・アドレス）を記す。

(2) A4判とし、余白は天地30ミリ、左右25ミリとする。

(3) 原稿は横書きとし、1行の文字数は41字、1ページの行数は32行に設定する。

(4) フォントについては、和文はMS明朝、英文はTimes New Romanを用いる。アラビア文字等のローマ字転写を示す際は、Times New Romanで表示できる文字については必ずTimes New Romanを用い、表示できないものについてのみ特殊フォントを使う。特殊フォントを使用する場合は、原稿のファイルをメール添付で送付する際に、あわせて原稿のPDFファイル（特殊フォント部分をマーカーで示すこと）も添付する。フォントの文字サイズは、10.5ポイントとする。アラビア数字（算用数字）はすべて半角とする。

(5) 数字は原則としてアラビア数字（算用数字）を用いる。ただし、本文中ではコンマを用いない。万以上の数字については、万・億・兆などの漢数字を用いることもできる。概数の場合は、十数年、数十人などとする。

(6) 読点は「、」、句点は「。」を用いる。

(7) 引用文を提示する際は、引用部分の行の始まりをすべて2字下げるとともに、引用部分の上下を半行空ける。

(8) 日本語以外の諸言語の文字については、原則として、漢字、ローマ字、キリル文字以外の文字を使用しない。漢字は原則として日本の常用漢字を使用する。ただし、固有名詞の表示や漢文文献の引用など、必要な場合はこの限りでない。アラビア文字等についてはローマ字による転写を用いる。ローマ字転写の方式は、基本的に国内外で採用されている標準的な方式にしたがい、原稿内で方式を統一する。

(9) 注は脚注とし、1からはじまる通し番号とする。原稿ファイルにおいて、MS-Wordの脚注機能を用いて作成する。

(10) 出典を示す参考文献とページ番号のみの注は設けない。下記３.で示すような形式にしたがって本文内に入れる。

(11) 原稿末に参考文献リストを置き、参考文献を示す。具体的な様式等については下記の２.を参照。

(12) 図版は、執筆者が完全版下となるデータを提供する。図版には通し番号を付し、本文中に挿入希望箇所を表示する。また、別紙に各図版の説明（キャプション）を記す。図

版のデータについては、必ずファイル名に図版の通し番号を入れ、原稿のファイルを送付する際に、画像データも合わせてメール添付で送付する。後者のファイルは BMP 形式が望ましい。

2．参考文献リストの様式

(1) 参考文献リストにおける文献の配列は、著者の姓のアルファベット順とする。単著・編著の区別は、配列順に関係しない。同一著者の複数の文献を掲げる場合は、出版年の古い順に並べる。同一著者の文献が同一年に複数ある場合は、タイトルのアルファベット順に、刊行年に a、b、c などを付加して区別する。なお、文献の言語別に分けて表示する方法を採ってもよい。

(2) 同じ著（編）者の文献が複数ある場合、2 番目以下の文献の著（編）者名部分を———（3 倍ダッシ）で表記する。

(3) 史料等について任意の略号を使用する場合は、参考文献リストにそれを示し、原稿内で統一的に用いる。

(4) 参考文献リストにおける書誌データの具体的な記載方法については、基本的に下記にしたがう。

①単行本

和文：著（編）者名、出版年、書名、出版地、出版社、の順に記す。

欧文：著（編）者名（姓 , 名の順）、出版年、書名（イタリック体）、出版地、出版社の順に記す。

（例）

佐口透 1986『新疆民族史研究』東京：吉川弘文館。

Jarring, Gunnar. 1991. *Prints from Kashgar: The Printing Office of the Swedish Mission in Eastern Turkestan, History and Production with an Attempt at a Bibliography*, Stockholm: Svensca Forskningsinstitutet i İstanbul.

②学術誌掲載論文等

和文：著者名、発行年、論文名、雑誌名、巻号、掲載ページ、の順に記す。

欧文：著者名（姓 , 名の順）、論文名、雑誌名（イタリック体）、巻号、掲載ページ、の順に記す。

（例）

佐口透 1950「新疆ウイグル社会の農業問題——1760–1820 年——」『史学雑誌』59(12)、22–50 頁。

Fletcher, Joseph F. 1982. “The Biography of Khwush Kipäk Beg (d.1781) in the Waifan Meng-ku Hui-pu wang kung piao chuan,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 36, pp. 167–172.

③論文集等掲載論文

和文：著者名、出版年、論文名、編者、書名、出版地、出版社、掲載ページ、の順に記す。

欧文：著者名（姓 , 名の順）、論文名、編者名、著書名（イタリック体）、出版地、出版社、掲載ページ、の順で記す。

（例）

羽田明 1964「Ghazāt-i-Müslimin 訳稿 ── Ya'qūb-bäg 反乱の一史料 ──」内陸アジア史学会編『内陸アジア史論集』東京：株式会社大安、324－339 頁。

Togan, Isenbike. 1992. "Islam in a Changing Society: The Khojas of Eastern Turkestan," in *Muslims in Central Asia: Expressions of Identity and Change*, edited by Jo-Ann Gross, Durham and London: Duke University Press, pp. 134－148.

④史料等に略号を使用する場合

略号、コロン（:）を挟んで書誌データを記す。

（例）

新疆図志：『新疆圖志』百十六巻、袁大化修、（清）王樹枏等撰、東方學會據志局本重校正増補、天津博愛印刷局印行、民国 12 年。

TN: (Mullā Sharaf al-Dīn A'lam ibn Nūr al-Dīn), *Tārīkh-nām* (*Tārīkh-i Rāqim*), ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所所蔵・写本番号 : r. 10190.

3．本文・注における文献の表記

(1) 本文もしくは注において参考文献に言及する際には、著（編）者姓、出版年、ページを表示し、括弧［　］内に入れる。ページ番号は、出版年の後に半角コロン（:）を挟んで示す。

(2) 同一文献に関して複数回の言及がある場合、前掲書、前掲論文、同上書、同上論文、op. cit.、ibid.、等の語は使用しない。

(3) 具体的な表記の方法については下記の形式にしたがう。

(a) 文の冒頭で言及する場合

佐口［1986: 173－174］は……

Jarring［1991: 85］によれば、……

ジャリロフ・河原・澤田・新免・堀［2008: 9］は……

羽田［1982: 80－81］、佐口［1963: 109－110］によれば……

(b) 文中または文末で言及する場合

……という指摘もあり［佐口 1986: 173－174］、本稿では……

……と指摘されている［羽田 1986: 86－87］。

……と指摘されている［Jarring 1991: 85］。

……という記述がある［TN: 122b–123a］。

……とされている［ジャリロフ・河原・澤田・新免・堀 2008: 9］。

……と論じられている［羽田 1982: 80–81; 佐口 1963: 109–110］。

……といわれる［羽田 1982: 80–81; 1986: 109–110］。

（4）インターネット取得のデータを用いる際には、脚注に、記事等の題目、サイト名、URL アドレス、閲覧年月日を記す。

（例）

“Strategy of Innovative Industrial Development of Kazakhstan for 2003–2015,” URL: http://en.government.kz/resources/docs/doc3, 閲覧日：2009 年 6 月 18 日。

（2017 年 6 月 21 日改訂）

日本中央アジア学会会則

第1条（名称）　本会は日本中央アジア学会（JACAS: The Japan Association for Central Asian Studies）と称する。

第2条（目的）　本会は、中央アジアを対象とする諸分野の研究を推進し、普及するとともに、研究上の連携を図ることを目的とする。ここで言う中央アジアとは、旧ソ連領中央アジア諸国と中国新疆ウイグル自治区を中心とし、その周辺地域を含むものとする。

第3条（事業）　本会は前記の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 研究および研究発表のための会合の開催
2. 会誌の発行
3. ウェブサイトの公開・運用
4. その他の必要な事業

第4条（会員）　本会の会員については以下の通りとする。

1. 中央アジア研究に関心をもつ個人で、本会の主旨に賛同する者。
2. 入会に際しては、原則として会員1名の推薦を必要とする。
3. 会員は、所定の会費を納入しなければならない。

第5条（役員）　本会は以下の役員をおく。役員は総会で承認を受けるものとする。役員の任期は4年とする。ただし、再任を妨げない。

1. 会長　1名
2. 理事　10名程度
3. 監事　1名

第6条（幹事）　本会の会務遂行のため、会長は幹事若干名をおくことができる。

第7条（総会）　原則として年1回、総会を開催する。

第8条（編集委員会）　会誌の編集・発行のため、本会に編集委員会を置く。編集委員会は、編集委員若干名により構成される。編集委員のうち1名を編集委員長とする。

第9条（会則変更）　本会則の改正は、総会において承認を経なければならない。

付則1　(1) 本会則は2004年4月1日から施行する。

(2) 会費は当面、年間3,000円（学生1,000円）とする。

付則2（2010年3月29日改正）

(1) 第8条（編集委員会）の規定については、2010年4月1日から施行する。

※ 2012年3月31日一部改正

日本中央アジア学会　役員（2018年7月31日現在）

会長　宇山智彦

理事　岡奈津子　小沼孝博　帯谷知可　川本正知
　　坂井弘紀　真田　安　澤田　稔　新免　康
　　樋渡雅人　堀川　徹　湯浅　剛　吉田世津子

監事　地田　徹朗

日本中央アジア学会　編集委員会

岡奈津子　小沼孝博　帯谷知可（委員長）
坂井弘紀　野田　仁　樋渡雅人　藤本透子
湯浅　剛　吉田世津子

『日本中央アジア学会報』編集幹事

櫻間　瑛

日本中央アジア学会報　第14号

2018年7月31日発行

編集・発行　日本中央アジア学会

〒060-0809
札幌市北区北９条西７丁目
北海道大学スラブ･ユーラシア研究センター
宇山智彦研究室内

E-mail: jacasoffice@gmail.com

URL: http://www.jacas.jp/

©2018 JACAS